

第4回 蘇東坡は先人、先輩を語った

——江山は豪俊を養う

2016年8月10日（水）。

この日はイノ君がくるとは予想していなかった。午前中は秦野に行き、帰ってきて遅い昼食をすませ、短い昼寝が終わりかけたところで、コツコツと窓を叩く音がした。

ボーツとした頭でコーヒーを淹れ始めた。秦野は盆地で、夏の昼間は海岸部よりかなり気温が高く、案外と疲れてしまったようだ。

「こんな暑い午後に熱いコーヒーというのもなんですけど」

「ボクは、なんでもあつついのが大好きだよ。風呂でもなんでもね。あつついとなんかしやきつとするよね」

真黒に日焼けしたイノ君は、団扇をぱたぱたさせながらコーヒーをすすった。

「熱い風呂が好きというのは昔の江戸っ子みたいですね。わたしも以前は暑さに強いのを自慢して、炎天下にジョギングしたりしましたけど、いまはもう年で、夏の暑さも違ってきたので、熱中症で倒れて人に迷惑をかけてもいけませんから、だらしなく昼寝をしていたところですよ」

「でも、クーラーは使ってないよね」

「それは暑さに強いのではなくて、年取って暑さを感じるのが鈍くなったただけなのでしよう。よかったら、コーヒーと一緒にこれでも」

秦野駅の名産売り場で買った豆菓子を出した。

「おじさんって、いつもこれだよ。よっぽど好きなんだ」

ピーナッツとあられ煎餅を固めた「豆太鼓」を四つに割りながらイノ君は笑った。

「秦野に行くのは1カ月に1回より少ないでしょう。行くたびに買うわけでもないから、どれかを選ぼうとして、やっぱりこれを買っておかないと後悔するかもって、どうしたっていつものになっちゃうんですよ」

「おじさんもこだわる方だからね」

「イノ君とは比較にならないと思いますよ」

「そっかなあ。あのチャチなホームページだってかなりのこだわりだよ。読んでくれる人もいないのに、しこしこ小説を書き続けるって、メチャクチャのこだわりじゃん」

「そう言われると、まあそういうこともかも」

「おじさんって、B型だったよね。やっぱ徹底してマイペースだってことなんだね。自分の好きなことを好きなようにやるよね。あの施設でも、自分のやり方を変えない頑固なところがあるって、言われてるみたいだし」

「えっ、頑固？ このわたしが？ そっかなあ。秦野の学校でも、年長者が失敗する一番の秘訣は、自己意識が強く壁を作ることだから、柔軟になるよう心がけたいって、いっつも話してるのは、イノ君も聞いてくれたですよ。そう言ってる手前、自分のことは結構注意してるつもりなんですけど。頑固だって、だれが言っていましたか？」

私が秦野に行くのは、そこにある職業技術校、いわゆる職業訓練校で、介護に関わる授業をほんの少しだけ担当しているからだ。

イノ君が7度目の職場を辞めたときに、この際、秦野の学校に行ってみたらと勧めた。始めは通学に時間がかかるのでためらっていたのだが、ほかに何かをするあてもないという消極的な理由で、行くようになった。姪がいる教室での授業は少々緊張したものだ。

「だれとかがって聞くのはあんましよくないかもね。おじさんも知ってんよね、トバー君が言ってたよ、昔の中国の偉い大臣が、陰口をたたいている人がいると聞かされたときに、その人の名を耳にするのを拒否したってという話。聞いてしまつたら、どうしたってその人を見る目が曇ってしまうという理由でね」

「それってどつかで読んだような気がしますけど。いまやイノ君の方がよっぽど昔の中国に詳しいのかも」

イノ君は豆菓子をばりばり食べながら、

「これって、おじさんがこだわるだけあって、うまいよね。コーヒーにも合うかも。こだわって毎回買ってきてくれたら、ボクがみんな食べてあげても構わないよ。それで、こだわりのチャチなホームページにトバー君の話はアップしたの？ 『我が生涯』の1回目をボクが聞いてきてあげてからもう1カ月半くらいになるよね」

「いちいち『チャチな』っていう枕詞を付けてくれなくてもいいと思うんですけど。アップまでもうあとちよつとです。ここんところあんまり暑いんで、最後の校正がなかなかできなくて」

「もしかして、ホームページに載せるのを、実はしぶってたりしない？ まだ疑ってたりするんじゃないの？ トバー君の話はボクがでつちあげた大法螺じゃないかって」

「失礼ながら、イノ君がでっちあげられるとは思っていません。イノ君が蘇東坡そとうはについてあんなに詳しく話せる可能性は、わたしがポケモンGOで日本縦断行脚を遂行する可能性よりずっと低いと思いますよ。後者ならヒマとスマホがありさえればできますからね」

「まあね。漢字だらけの蘇東坡の詩をボクが自発的に読んだりするはずないもん
な」

「トバー君っていう人が存在するのは厳然たる事実だと認めるのはやぶさかではありませんけれど、あの声にはどうしても違和感があります。『フーテンのトバー』ってヘンですよ。トバー君が自分は蘇東坡だって言ってるのを、イノ君はどう思っているんですか？」

「本物かどうかってことなら、そりゃ、本物に決まってんよね。何度も言ってる

ように、100パーあやしくて、絶対にありえないんだから、真実ってことじゃんか」

「それはどういう理屈でしょうかね？」

「理屈では説明不能ってこと。それはすなわち完璧な真実だってこと。嘘ならでつちあげの説明であれこれ補強しないとならないけど、真実は何も補強する必要がない。まあ、そういうことだよ」

「あのですね、説明不要と説明不能とは違うと思いますけど。いずれにしても、トバー君っていうのはですよ、三つのうちのどれかだと思っんですよ。イノ君をだまそうと接近してきた妙な老人、頭がショートして自分が蘇東坡だと思っ込んでしまったマニアックな研究者、そして蘇東坡その人です。この順に可能性が小さくなるとわたしはにらんでますけど」

「ボクは逆だと思うなあ。でも、おじさんが疑うのもわかるんで、今回もまたズバリと聞いてみたんだ」

「いつもの一点突破ですか？ で、何を？」

「単刀直入、『あんたは仙人なんすかねえ』って。その返事はここに入っているからあとで聞いてみて」

イノ君はICレコーダーを取り出した。

「これで3回目ですね。となると、あんまり溜めこんでもいけませんから、いよいよ1回目をアップしないといけませんね」

「ところで、今日は、学校である事件のことは話したりした？」

「あの事件って、知的障害者施設のあれですか？」

「19人も殺害した元職員の容疑者に、障害者への露骨な差別意識があるらしい

ってことについて、おじさんなら、生徒を相手にながながと話したんじゃないかなって思ったんだけど」

「話そうかと思ったりもしましたけど、授業内容とは直接関わりないし、あまりにも重いので、やめておきました」

「おじさんってさあ、授業内容と関係のないことを、いっぱいしゃべっていたように思うけど」

「そんなことないですよ。必ずどこかで関係することしか話してませんよ。今回の事件だって、『人は存在しているだけで意味があるのか』という命題として問題設定すれば、ぴったり関係するんですけどね」

「その命題ってさあ、『意味がある』って安易に答えているだけじゃ、なんの力にもならないかもって思うんだよなあ。税金のムダづかいだとか、社会の負担にな

っているとか、そういった下品な論理で迫ってこられたら、いかにも弱い感じがするもの。『きれいごとおっしゃいまして、実に結構でげすな、ふん』って、冷笑されて終わりだよ」

「そうなんですか？」

「格差が広がって、下に追いやられた人は、自分よりも下の存在を求めらるってことがあるよね。それは最も愚劣なことであるから、きれいごとなんかにかまっちゃいられないってことで、下品な論理の爆裂でゴリ押ししてことになると思うんだ」

「なるほど。身分制社会のもとでは、階層の枠外に、存在価値のないとされる人々を置くことで、社会の安定を図ったということがあったようですね。基本的人権がなかった時代のサイテーの作戦ですけど」

「その基本的人権をなくそうと、たいそうご立派なご意見を開陳される元法務大臣がいるような国だから、そのサイテー作戦発動つてことになるのかもね。何しろ一億総活躍社会だもの、活躍しない人は存在価値がないつてことだろうからさ。事件の容疑者の言ってることと通じてると思うよ」

「それはちよつと飛躍じゃないでしょうか？」

「それにさ、その容疑者を精神病院に閉じ込めておくべきだったとかつて言われているでしょう。犯罪を予告した精神疾患のあるような人間は社会の監視を強めて、GPSを埋め込むようなことも考えるべきだと発言したご立派な国会議員がいるらしいもんな。それつて被害にあった人たちを守ろうとする文脈で言われているんだけど、底には今回の容疑者と通じる差別意識があるように感じられてならないんだ」

「そうなんですか？」

「ボクなんかはさ、期待されているような『産む機械』には絶対にならないから、一億総活躍社会の風上にも風下にも置けない人間だもんな。人権どころか存在も認めてもらえないって感じるから、敏感すぎるのかもね。それに、ジョン・クレアの詩を読むようなやかからは、当のジョン・クレア同様に閉じ込めておけつてこともかと思ったりもするしさ」

「どンドン飛躍して行きますね」

「トバー君の詩にあった戒えびすとか、ジョン・クレアの詩にときどき出てくるジプシーとかも、差別される存在を社会が必要としていたつてことがあつたんだろうなあつて想像するんだ。いまだつておんなじだったりするんだよ。とつてもひどい言い方をすると、存在価値のない人間がいるつていうことのために彼らの存在

意義があるってことになるんだよね。そんなことを絶対に認めてはいけないんだよ」

「どこまで飛躍するのですかねえ」

「あのね、ジョン・クレアの詩にこんなのがあるんだ。

わたしはジプシーたちに住む場所を無料で提供していた。

だがついに、ぞっとするほどいやな「囲い込み」がやってきて、

わたしを教区の奴隷にしてしまった。

今ではジプシーたちはわたしからさらに遠いところで滞在している。

かれらは教区のいかなる境界も好きではないからだ。

(鈴木蓮一訳、198ページ)

この詩で、「わたし」と言っているのは、ソーデイ・ウエルというところの入会地なんだ。「囲い込み」によって、社会の底辺にある者ほど虐げられている現実を「わたし」は指摘し、その底辺のまた下にある「わたし」がもつともひどい仕打ちを受けていると嘆くんだけど、その「わたし」と切り離されてしまったジプシーに「わたし」は同情しているんだよ。格差で下に追いやられた人々を分断化しようとするいまの動きとまるつきり逆なんだよ。

ジョン・クレアって人は入会地で生活していたジプシーにいつもあたたかい眼差しを向けていたんだ。そんなジョン・クレアが44歳で精神病院に入れられて、その後ずっと社会から隔離されてしまったっていうのは、なんか象徴的なような気がするんだ。戎に人間的価値を見出そうとしたトーパー君も流罪になったわけ

だしね」

「今日の暑さにふさわしい熱弁をイノ君がふるってくれて、飛躍はあるにしても、大筋でわたしも賛同したいと思います。ただし、蘇東坡が流罪になったのはまったく異なる文脈からだと思いますよ」

「そこところは、流罪になった理由をトバー君からまだ聞いてないんでわからない。だって、ちっとも話が進んでいかないんだもの。最初の旅がまだ終わらない。ボクがいろいろと口をはさむのもいけないだろうけどね」

「こんな調子ですと、蘇東坡の詩はいっぱいありますから、一生分を語るうとしたら、10回とか20回とかでは絶対に終わらないでしょうね」

「そうすると、ボクがおごる総額もかなりのものになるよね。これは考えものだな。おじさんのチャチなホームページに1人アクセスしたらボクに10円払うっ

ていうのはどう？」

「100円でいいんですか？ 奇跡的に3桁の大台に乗っても、10000円にしかなりませんよ」

「そっかあ。じゃあ、1人アクセスしたら1万円かな」

「それは高すぎ晋作ですよ」

「だったら、豆太鼓1枚でもいいか」

イノ君はその日買ってきた豆太鼓をバリバリすべてたいらげながら、トーバー君とは関係のない話をしばらくして帰った。

音声を再生すると、今回もいきなりトーバー君の高い調子の声が出てきた。イノ君は一点突破の最初の質問を終えてからスイッチを押しただろう。

そのことは、そのうちきつと尋ねられるだろうと思っていました。

私が8歳で弟子入りした張易簡ちやういかん先生の小学は道教じやうきやうの寺院にありましたので、早くから道教に親しみ、また、少年のころから世捨て人に憧れてもいましたから、仙人との距離はそのころから近いものがあつたと思います。その後も、道士の友人がたくさんいて、私自身も蘇仙そせんとか坡仙はせんとかの号を称して道士に似たふるまいをよくしてまいりましたから、仙人との距離はさらに縮んだと思います。死んでからは、仙人になったという説が生じましたし、もともと私は昔むかしの仙人の生まれ変わりであつたという説も生じました。

不老長生せんじゆつのような仙術には少年のときから興味がありました。薬草や水銀を使つて仙薬を実際に作つてみたこともあります。しかし、できたものを飲んで試し

たりはしていません。歴史オタクであった私は、不老不死の薬を飲んで逆に健康を損なって早死にした皇帝が大勢いたことをよく承知していました。仙薬作りへの興味は化学実験と似ていて、熱の加え方や混ぜ合わせ方で色や形態がいろいろに変化するのがおもしろかったのです。道士からは心身を鍛錬する方法も教わりました。これは試してみて、効果があると実感できたものはより深く探究し、いまも日々用いています。

——それかあ。トバー君お得意の、サーフィン前のヘンな準備体操とか、ヘソの下に意識を集中させる妙な呼吸法とかは、そこからきたんだね。ボクも、もつと教えてもらって仙人を目指そうかなあ。

㊦ あなたは仙人になったりしたいと思いませんか。

——そりやあね、山に住んで、霞を食らって生きていられたら、働かなくてすむだろうから、それだけでもいいと思うよ。

㊦ あなたは働くのがいやですか。

——働かなくていいのなら、そうしたいよね。だけど、働かないわけにはいかな
いんだよなあ。当たり前の話、お金がじゃらじゃら出てくる打出の小槌があるわ
けじゃないから、働かないと食って行けもの。親であれ社会であれ、何かにぶら
さがって食べさせてもらうっていうのはよくないもんね。老齢であるとか、病気

であるとか、なんらかのハンディがあれば、支えられてしかるべきだけども。それに、社会でまともに生きなければという強迫観念みたいなものが、なぜかボクにはあるんだなあ。母親のせいかもな。

それで、「まとも」っていま言っちゃったけど、その言い方がどうかなあって思ったりする。自分が「まとも」ではないという意識がボクにはあるから、「まとも」にならなければというところにこだわりがあったりするんだよね。だから、そんなこととかあれこれの価値観を超越した仙人っていうのはいいのかもなあって思っちゃうよね。それにさ、霞を食らって生きていられたら、自然の生態系に負荷をかけずにすむしね。

① 仙人はエコロジカル・フットプリントがほぼゼロってことですかね。

——トバー君って、案外と現代的な用語をよく使うよね。昔の人じゃないみたい。エコロジカル・フットプリントがゼロっていうのは、仙人の新しいイメージとしていいかもね。なんか、本気で仙人になりたくなってきた。それで、仙人になった人ってホントにいたの？

㊦ 身近なところでは、私の友人が仙人になったという話があります。

罪人つみびととなって黄州こうしゅうに流されたときに、陸惟忠りくゐちゆうという道士が訪ねてきました。私と同郷の眉山びざん県の出身で、失意に沈む私を慰めてやろうとわざわざきてくれたのです。陸惟忠は郷里のことや同郷の者の消息をいろいろと語ってくれて、

「陳太初君ちんたいしよのその後はご存知ですか」

「陳君でしたら、科挙に合格してどこかの地方官になり、何か不本意なことでもあったのか、辞めてしまったということを知りましたけれど、このごろはどうされていられるのでしょうか」

「ひよっとすると、こうして2人で噂し合っているのを、そこらの木の枝に腰掛かけて、窓越しに見ているかもしれないぞ。もう数年になるでしょうか、漢州かんしゅうで尸解しかいされましたので」

陸惟忠は愉快そうに窓の外の木を指差して笑いましたが、私は、はっと胸を突かれる思いがして、深く嘆息したのでした。

——えーと、シカイというのは、なんのこと？

㊦

世間には死んだと見せて、実は仙人になるのが尸解です。崖から飛び降りて崖下には死骸が残るけれど、本人は天に昇って仙人になったり、あるいは棺に納められた死骸が抜け出て仙人になったりとかいろいろあります。道士が修行を積む一つの大きな目標が尸解で、陸惟忠は陳君の尸解を賛美したのですが、私は40歳になるかならぬかで陳君が亡くなったことを悲しく受け止めたのでした。

陳君は張先生の小学で一緒に学んだ同窓生でした。私よりほんの少し年が下で、100人余りもいた生徒のなかで、張先生はとくに目をかけてくださったのが陳君と私の2人でした。陳君は私より少し遅れて科挙に合格しました。

その陳君が尸解した顛末を陸惟忠はこのように語りました。

ごしどう かんしゅう
「呉師道が漢州の知事だったことは聞いていましたようか。呉師道も我らと同じ蜀人^{しよくじん}で、漢州は郷里に近いこともあって、呉師道が赴任すると、たくさんのお類

縁者が次々に訪れました。ある日のこと、陳君が道士のなりでふらっとやってきましたので、呉師道は意外に思い、どうしたことかと尋ねますと、『本来の願いに立ち返ったままです』との答えでありました」

「陳君は『本来の願い』と言ったのですか。そうでしたか。かつての修学時代に、世捨て人への憧れを持ち続けていた私の心の内を察して、世を捨てるのは自分一人だけのため、家のため、民のため、国のために、我が身を役立てなければいけないと、陳君が熱く説いてくれたことがありました。陳君が言うのはいちいちもつともなことばかりで、その陳君に『本来の願い』があつたとは、まったく思いませんでした」

「漢州に現れた陳君の衣服はぼろぼろで、町で物乞いをしながらその日その日を送っていました。その様子を見て、呉師道は、一度は官人になつた者にみすばら

しいことはさせられないと、自分の屋敷に呼んで、客人としてもてなしました。

そして年が改まった一月一日の朝、陳君は『これから旅に出ようと思います。衣服と少々の食べ物を頂戴できませぬか』と、呉師道に暇乞いをしました。望みのもの得ると、陳君はすぐに屋敷を出て行き、そして、往来で出会った貧乏人にそれらをやつてしまうと、役所の門によりかかつて地面に座り、そのまま死んでしまったのです。一年の最初の日から役所の門に遺骸があるという状態は縁起のいいものではないので、呉師道は州兵に命じて、町の外に運び出して焼かせることにしました。

州兵は遺骸を担ぎ上げつつ、

『この糞道士め、なんだつてこの俺様に、元日からこんな面倒をかけさせるのだ』

口汚く罵りますと、遺骸はぱつと目を開き、

『わしを運ぶのがそんなにいやか。だったら、おまえを煩わせないでやろう』

すつと立ち上がって、すたすた歩き出し、郊外の橋のほとりにまで行き、そこでまた改めて死んだのでした。そして柴を積んで遺骸を焼きますと、立ち上る煙のなかに、はっきりと陳君の姿が見え、そのまま天へと昇って行ったのです」

陳君は本当に尸解を遂げたのでしょうか。私はそうは受け止めませんでした。これと類似のエピソードは昔から数多く語られていて、陳君ならではということころは特に感じられませんでした。

——実際になったかどうかは別として、その人は仙人にはなりたかつたんだろかね。科挙を受けて官僚にはなったものの、きつとなんか無理していたんだよね。

そういう人だからこそトバー君を一生懸命に説得したんだよ。なんかわかるよ

なあ。

① ここで前回の旅の続きを話しますと、ちょうど仙人とか尸解にまつわることが出てきますので、そちらに話を移すとしましよう。

なんせいこう

にんし

南井口で任孜と会ったところまでお話しました。翌朝に任孜と別れ、船はまた川を下って安樂山あんらくざんという山の下にまできますと、かつて張道陵ちやうどうりやうがこの山に住んで

いたと、船頭が教えてくれました。張道陵は蜀人にはよく知られた人物で、道教

の教派の一つ、五斗米道ごとうまいどうの始祖です。私より1000年ほど昔の、後漢ごかんの時代に

生まれ、初めは孔子こうしの教えを学び、これは世の人に役に立つものではないと見切

って、長生ちやうせいの術を学び直しました。長生の術は、いまでいうと医学、薬学に当た

り、これは実際に役に立ちます。このころは政治がひどく乱れ、孔子の教えへの

信頼感が大きく揺らいだ時代でした。無理が通れば道理が引つ込むではありませんけれど、剥き出しの力の前に孔子の学問などは無力であると、張道陵は長生の術をもって人々の救済に乗り出そうとしたのです。

——えーと、いまの話とはたぶん関係ないけど、いまの日本では、哲学とか文学とかの文系の学問は役に立たないから大学で教えなくてもいいみたいなことを言う人がいるんだよね。医学とか薬学とか工学とかはつきりと役立つタイプの学問はその存在意義を簡単に示せるからいいけど、ボクなんかは英詩を学んでさ、正直言つて100パー役に立ちませんよね。だけど、就職試験とかで聞かれたら、何かしら有用であるかのようなことを言わないとならなかつたんだよなあ。本人が思っていないようなことを言うんだから、まるで説得力がなかつた。役に立たな

いものこそが一番大切なんだって、開き直って胸を張って見せたらよかったのかもしれないけど、そんな勇氣はなかったよなあ。いまになってここでぼやいてもしょうがないけどさ。

㊦ 張道陵は長生術を全得すると、蜀の人々はほかの地方の人々よりも純朴であるから術の効果が大きく出やすいだろうと考えて蜀の地に行き、実践に乗り出すと、大勢の人々の病気を治すことに成功して民衆の心を掴み、たちまち数万の弟子を獲得しました。その後、五斗米道の教団は三国志の時代に前に小さいながらも独立政権を樹立するに至り、紆余曲折はありながらも長く続いて、1000年経つても安樂山には張道陵の靈威がまざまざと残っているとされてきました。その一つが、木の葉の裏の篆符てんぷでした。安樂山に生える木には、葉の裏に何か筆で

記した文字のように見える模様のあるものがあって、それは張道陵が書いた篆符なのだと、人々は言っていました。篆符とは天の意向を表わした符号です。

私たちは安樂山の下に船を泊め、張道陵を祀る道教の寺院を訪ねました。靈驗あらたかなるその葉を見せられ、私はごく率直に、

「この篆符の意味するところはどのようなことでしょうか」

と、尋ねました。

「天意はまことに玄妙、凡人には容易に知れ難いものにございます。また、安易に天機を漏らしてはならぬと深く戒められております。せつかくのお尋ねでございしますが、どなたにもお答えはしておりません」

「せつかくの篆符も、読めないもの、読んでも黙っていなければならないものであるのなら、実のところは無用なのではありませんか」

そのようなことを言ったので、とても嫌そうな顔をされてしまいました。

その寺院には張道陵が自ら刻んだという玉印なるものがあつて、それを押した符ふだは病気を治すなどの靈威があるとされていきました。

天師と崇められた張道陵は、

不老不死の仙人となつていまもどこかにいるのだろうか。

天師の刻んだありがたい玉印が、

いまも子孫に伝わっているらしいが、

肝心の不老不死の術は伝えられなかったのだろう。

子孫はこれまで一人残らずみんな死んでしまっている。

天師だけが生死の境を抜けて、

この世界の外に出て行ったのなら、

それはそれで結構であろうけれど、

なぜかいい評判を得ることにいまもすこぶる熱心で、

ひと山に万本もある木の億兆もの葉の裏に、

せつせと文字を書き続けていなきるとは、

なんとご苦労千万ではあるまいか。

——あのですね、トバー君つてもしかして皮肉屋だった？ そりや、嫌な顔を

されるよね。張道陵を信じている人からしたら、この詩ってかなりのイヤミだよ
ね。

Ⓣ 嫌味を言う気はなくて、思ったそのままを詩にただけです。これに限らず、私がぼつと口にしたことで、相手の憎しみを買ってしまったということが、気付かぬうちにときたまあったようです。

——口は災いのもとつていうけど、まさにそれだね。トバー君はそれで敵を作ってしまったって、流罪になったりしたってこと？

Ⓣ それについては徐々にお聞きいただくこととして、安樂山から少し下流のへいとせん平都山にも、道教にまつわる言い伝えがありました。やはり1000年ほど昔王遠、陰長生という2人の真人がこの山の頂から蟬蛻したと言われています。

真人とは、道士が目指す理想の境地に到達した人です。道教は、その字が示す

通りに、最も大切な概念として「道」みちがあります。前回申し上げた「天の道」、宇宙を貫く根本原理です。「道」と一体化したときに真の人間になれるということから真人と言います。

蟬蛻とは、蟬が脱皮して羽化するのになぞらえて仙人になることを言います。人としての骸むくろが残ってもそれは蟬の抜け殻と同じです。蟬蛻と尸解はほぼ同じ意味です。

——流れとしては、真人になった道士が、次の段階で蟬蛻して仙人になるっていうこと？



必ずしもそういうことではなくて、もとを言うと、仙人と真人とは別々のと

ころから出てきた概念です。仙人は古い素朴な伝説が始まりで、例えば遠い東の海に浮かぶ蓬萊山ほうらいさんであるとか、遠い西の果ての高い山の崑崙山こんろんさんなどに、空を自由に飛び、老いることも死ぬこともない仙人がいるということが言われていました。そのような仙人の存在を信じるのを神仙信仰しんせんといいます。

一方で、真人は哲学的な思索から考え出されました。道と一体化した境地に達すれば、心に憂うものはなく、死を恐れることもないということろうしを老子や莊子そうしが言い、そこから道教が始まりました。何ものにとらわれない真人の境地はイメージ的に仙人と近いことから、次第に両者が合流して行ったのです。

中国では仙人を含むたくさんさんの神様が信仰されてきました。おおまかに整理すると3種類に分けられるでしょうか。中国古来の神、インドなど外国から渡ってきた神、そして実在した人物が化した神です。あるいは、道教の神、仏教の神、

その他の民間信仰の神という分け方もできるでしょうか。どちらにしても二者の境目ははつきりとしたものではありません。

こうし

かいりきらんしん

孔子がいみじくも「怪力乱神を語らず」と言いましたように、儒学は現実を合理的に理解しようとする学問で、摩訶不思議な霊力は語りません。しかし、否定したわけではありません。儒学にも、古くからの民間信仰に根差した宗教的な色合いが強くなりました。西暦1世紀ごろにインドから仏教が伝わってくると、儒学も道教もそれに刺激されて教義の体系化が進められ、儒学はより儒学らしく、道教はより道教らしくなる方向を模索して発展しました。三者が互いに排斥し合った歴史もありましたが、宋の時代になると、それら三者が接近し、融合して新たなものを生み出すようなことにもなりました。私は根底において三者は混然一体のものであるとの捉え方をしていました。やはり三者は厳格に分けるべきだと

の主張ももちろん強くありました。

——宗教ということになってくると、ボクにはよくわからないんだけど、違いをことさらに際立たせて、それで対立するのってどうなのかなあっていつも思ったりするんだ。キリスト教のなかでもめたり、イスラム教のなかでもめたりってというのは、まるつきり理解できない。宗教じゃなくても、愛国心だってジェンダーだって、何かの枠組みを設けてその内側に押し込めておこうとする圧力ってか
なりのものがあるよね。境界を超えようとか、枠をなくそうとかするのを、非難したりするのって意味わかんないよ。

いまオリンピックが開かれているけど、日本人なら日本の選手を応援するのが当然ってというのはなんかヘンな気がしてしょうがない。どこの国の選手だって

みんな頑張ってるんだから好きなように応援したらいいじゃんって思うよ。選手を応援する気持ちが、いつの間にか国威発揚のお御輿をいっしょにかついでいるようになってしまふのってなんかいやだね。選手を応援したいんで、別に日本を応援したいんじゃないんだよねあ。

LGBTの理解はかなり進んできて、それはとつてもいいことで、公的な場ではさすがに露骨なことは言いにくくなつてはいても、「男らしく」「女らしく」とつていう圧力は依然として強いよね。どっかの校長が全校集会で「女性にとつても大切なことは子供を2人以上産むこと」とか演説ぶつたつてことがあつたよねあ。その校長は辞めたらしいけど、その発言を支持するような人つてたぶんたくさんいるんだよね。

狭い枠組みのなかに閉じこもつたら息苦しいだろうなあつてボクなんかは思う

んだけど、きつとその方がしつかりとした足場があつて、自分自身が確固不動の堂々として存在であると勘違いしやすくなったりするんだろなあ。足場のない連中を見下すことで、ますます自分が偉くなったと思ひ込めるだろうし。

いっけねえ、なんか早くも酔つてきたみたい。言つてることが無茶苦茶だね。

叔父さんにもよく注意されるんだ、すぐに飛躍するつて。

㊦ 話を平都山にもどしましょう。私たちは船からあがり、王遠、陰長生という

2人の真人せんとかんに由来する仙都観を訪ねました。

山の前には川が広々と流れ、

山の上には木が高々と茂っている。

旅人は船を置いてそそくさと坂を登る。

路傍の秋の草が冬を迎えて枯れて行くように、

千年という歲月もそそくさと過ぎ去った。

そびえたつ仙都観に至ると、

この頂から、竜の曳く車、虎のかつぐ駕籠に乗って、

二人の真人が遙かな仙界に飛び去ったという。

真人はもはやこの世間を顧みることはなく、

人が生まれたり死んだりするのは、

せいぜい朝と夕の入れ替わりくらいにしか思っていないのだろう。

仙術を獲得しようとして、

米粒を断ち霞を食らう苦行に耐える人がいまもいる。

私が望むのは、

無も有もないという哲理を会得して、

風に乗り雲に乗り、

世を超越した境地に至ることだ。

この詩にありますように、私が世捨て人に憧れ、道教に強い関心があったのは、山中で修行を積んで仙人になりたかったからではありません。私が求めたのは、思考の自由な飛翔と言っていいでしょう。仙人はそのイメージにぴったり合うものだったのです。

——ということは、トバー君は仙人ではないってこと？ とすると、900年

以上も前に死んだはずの蘇東坡がいまここにいるのはどうしてなんだ？

㊦ それは私にもわかりません。気が付いたら900年の歳月が経って、あの雪の日以来のあなたとの再会となったのでしよう。

それはそうとして、私たちが仙都観に到着したとき、満面の笑みで出迎えてくれる人がいました。

「いやあ、あなたの方でしたか。昨夜はしきりに鹿が鳴きましたので、これはきつと誰がしかるべき人がくるに違いないと、朝からここですつと待っていたのです」それは李^リ県知事で、父とは面識がありましたけれど、特に親しかったわけではありません。聞けば、かつて真人と暮らしていた白い鹿の子孫が山にいて、昇仙した真人がいつしか帰ってくるのをいまも待っているというのです。真人の話し

相手になりうるような人が山にいくと、真人が帰ってくる可能性が高くなるということで、そのような人のくる前の晩は鹿がとりわけ大きな声で鳴くという話でした。

太陽と月はあくせくと天空を走る一方で、

人は地上の塵の世にがちりとつながれている。

仙人は跡形もなく飛び去り、

山には鹿が遺された。

鹿は霞の彼方に真人を追い求めて悲しみ、

心が通じそうな人がくると知ると、

松を揺らす風とともにしきりに鳴く。

その鹿が夜の間に鳴いていたと聞いて、

はたして私が該当する人間なのか、

鹿に尋ねてみたいと思っても、

山は秋の草におおわれ、

鹿の行方はどことも知れない。

——これは、鹿と聞いて、もしかすると、本性が鹿であるトバー君の心が騒いだってという詩かな？ もしも鹿が、トバー君は真人の仲間になるべきだと言ったら、その言葉に従って自然のなかに入って行ったりした？ それとも振り切つてあくまでも都に行った？

ⓧ 幸か不幸か、鹿の姿はどこにも見えませんでしたので、そういった難問に頭を悩まされることなく船にもどったのでした。

船は忠州ちゅうしゅうを通過し、さらに南に数十里のところびょうぶさんで屏風山の下に達しました。

川が曲がり、船が巡り行くと、

山の上に連なる岩の壁は、

屏風を折り曲げるかのように姿を変える。

中に一つ、とりわけ抜きん出た岩があって、

あたかも人が屹立しているかのようだ。

かつてここに一人の妻がいて、

旅に出たままの夫がいまに帰ってくるのではないかと、

山に立って川を見続けるうちに、

岩になってしまったという。

岩は千古の昔も昨日も同じ形であるけれど、

船は来ては船は去り、いつもまでもとどまることなく、

川は流れては川は去り、いつもまでもとどまることがない。

私たちは川に浮かぶ葉のように大海へと流れ下る。

ああ、できることなら、あの山にしばし残って、

月が昇るのを待ちたいものだ。

月光が岩に当たって、

気高い妻の姿を浮かび上がらせるのを見たいから。

人の形をしたその岩は望夫台ぼうふだいと呼ばれていました。それを見上げる私は、我が母を想わずにはいられませんでした。

我が父は家を留守にすることが多く、何年も帰らずにいたことがたびたびでした。父がいない間は、母は家を守り、私たちを厳しく教え導きました。母は歴史書をよく読んでくださいました。母がまず読み上げ、かみくだいた説明してくださってから、私たちが読み上げるといことを繰り返しながら、大部の歴史書を読み進め、あるとき後漢時代ごかんの歴史書である『後漢書』ごかんじょで、范滂はんぼうという人が母親と別れる場面に至りました。母はにわかになら声をつまらせ、そこから先に進めなくなりしました。そのときは姉も一緒に、姉はきつと口を結び、握りしめたこぶしが小刻みに震えていました。

范滂は先ほどの張道陵とほぼ同じ時代の人でした。張道陵は孔子の教えを棄て

ましたが、范滂は乱れた世を正すことができるのは孔子の教えしかないとの強い信念を持っていました。范滂は、権力の中枢にあつて好き放題をしている人々を鋭く批判して嫌われ、都を追われて郷里に帰りました。范滂を憎悪する人々は皇帝に嘘を吹き込み、反逆罪で范滂を掴まえようとなりました。逮捕状を持った役人が范滂の村にやってくると、県の長官はその役員を役所に留めて范滂の家に向かい、「私と一緒に逃げましょう」と言いました。都に連行されれば死刑は免れません。范滂は法に反することはできないと、母親に別れを告げて、自ら出向いて逮捕されたのでした。

姉の鋭い視線を感じつつ、私は母に言いました。

「私がもしも范滂と同じように振る舞ったならば、母上は許してくださいませうか」

母は言いました。

「おまえが范滂になれて、この母が范滂の母になれないことがありましようか」

我が姉は姉弟きょうだい3人のなかで最も正義感の強い人でした。姉ならず范滂のようにするでしょう。しかし、姉は女に生まれたので范滂のようには決してなれないのでした。だから、姉の思いをくんで、私は范滂になると母に言ったのです。4人のスーパースターに憧れたのは、范滂のようになるということであつたのです。

——でも、お姉さんも世捨て人に憧れていたんだよね。

㊦ あなたがさきほど言われたように、枠組みの外に出たいという思いが強かつたのでしょうか。范滂になりたいと思うことと世捨て人に憧れることは矛盾してい

るようで、実はつながっているのだと思います。

——よくわからないけど、きっとトバー君も同じなんだろうね。

① 我が姉は、世の規範の呪縛のなかでもがき、不幸な死から逃れられませんでしたが。以来、父と母の関係はぎくしゃくし、母はいつも沈んだ顔で、私たち兄弟と話すこともほとんどなくなってしまいました。私たち兄弟としては、科挙に合格すれば父も母も喜んでくれて、家族のもろもろもよい方向で解決するはずだと、勉強に専念しました。しかし、合格発表の直後に母は亡くなってしまったのです。望天台を見上げて、月の光のもとで、母と心の底にあるものを包まずに語ってみたいと思ったのでした。

——都に向かうトバー君にはいろいろと複雑なものがあつたつてことだね。そういうトバー君だから、ここでこうして一緒に呑んでいられるんだよなあ、たぶん。立身出世を目指してまっしぐらみたいなのはボクは死ぬほど苦手だから。

㊦ 旅で次に見たのは諸葛孔明しよかつこうめいにまつわる遺跡でした。諸葛孔明は我ら蜀人の偉

大な先人で、各地に所縁きのものがあつて、夔州きには、諸葛孔明が石を積んで「八陣図」はちじんずを作つたとの言い伝えのある河原がありました。八陣図とは絶対に破れない最強の陣法を示したものです。

広い河原に岩がごろごろごろがっている。

あれとこれとそれが八陣図なのだろうか。

川に水がみなぎる季節がくれば、

それらの岩はどれも流れの下に隠れてしまう。

諸葛孔明は死んで久しく、

岩の並びを弁別することはもはや誰にもできない。

岩の並びがきちんと保たれていても、

諸葛孔明の神のような用兵はそれからは会得できないだろう。

真に優れた人は自分で心に悟るのであって、

その要諦をかたちにして留め置けるものではない。

後世の人々は何もわからぬままに自説を立てているだけだ。

かつて英雄が並び立って競い合ったとき、

禍が次から次へと長く続き、

民衆は戦に駆り出されて野に倒れ川に血を流し、

町からは人影が消えて炊事の煙が立たなくなった。

英雄が大勝負に出ると、

民衆の命は雪に湯を注ぐようにしてかき消された。

目の前の戦闘にひたすら追いまくられ、

遠く先を見通したはかりごとはどこにもなかった。

そこに諸葛孔明が現れ、群雄どもを一掃しようとした。

蜀は小国であったから節制を旨とし、

困難に耐えに耐えてその日がくるのを待った。

諸葛孔明の志は立派だったが、

計画は壮大すぎて遠回りをし、

歳月は瞬く間に流れ、

軍団が十分に整えられる前に、

英気は折れ、諸葛孔明は死んでしまった。

ここの河原に八陣図が残され、

その壮図は知れはしても、

民衆を禍から救うのに役立ちはしなかった。

——あれれ？ 故郷の偉大な英雄を賛美する詩かと思つて聞いていたんだけど、最後のシメはまた皮肉ですか？ トーバー君つて、なんかひねつたことを言うのが好きみたいだね。諸葛孔明に対してこういう詩を詠んだとなると、その評価は

意外と高くなかったってこと？

① 深く尊敬しているからこそつい厳しい言辞を吐いてしまうのでしょう。実は、我が父も諸葛孔明をいつも批判的に論じて、まわりからはあえて異論を立てているといぶかしげに見られたものです。

小国ながらも正しい道を行って天下に平和をもたらそうとした諸葛孔明の志はまことに尊いものでした。諸葛孔明は正々堂々とした戦いを志向し、それには国力の差が大きな障壁になりました。三国鼎立と言っても、蜀は圧倒的に小国でした。横綱や大関に対して、小兵の十両力士が正面からの寄り切りを目指すようなものです。敵に対抗しうる軍団を編成するには、民衆を厳しく統制して国力のすべてを軍事に振り向けなければなりません。天下に平和をもたらそうとし

て自国の民衆を疲れさせてしまい、諸葛孔明が陣没すると、蜀はたちまち崩壊してしまったのです。

こうして諸葛孔明を批判した私ですが、900年を経て改めて思うのは、「壮大すぎて遠回り」と言われようとも、志を正しく持つことの大切さです。この前、蜀の文化風土について申し上げました。蜀人には文化では負けないとの気構えがありました。諸葛孔明が軍事力によつて天下に平和をもたらそうとしたのは、まだまだ近道を選択していたのです。いまの世界を見れば、いかなる遠回りであっても文化の力によつて平和を追求すべきであると、なおのこと強く思います。

——それって、遠回りではきつとないんだよ。武力で平和を得ようとするのは、志として正しくないばかりか本当はメチャクチャ遠回りなんだよ。事実をちゃん

と調べたらそういう結論以外にないと思うんだけど。

㊦ 古くは孟子もうしという人がそのようなことを言っていました。迂遠すぎると笑われても決してへこたれなかった孟子の強靱さを見習いたいものです。

——孟子っていうのは名前だけは聞いたことあるけど。昔の人もいろいろなことを考えていたんだね。これまで全然関心がなかったんだけど。

㊧ この詩では諸葛孔明批判をしたものの、自分自身はまだ何もしていなくて、口先だけのことでした。いつか孟子の考えを吟味しつつ、現代の世界において何ができるのか考えることもしてみたいと思います。

さて、私たちを乗せた船は、長江の最大の難関にして最大の景勝地である大峽谷、三峽へと入って行きました。三峽とは、上流から瞿塘峽、巫峽、西陵峽という三つの峽谷で、切り立った岩の壁が延々と続きます。瞿塘峽は長さが8キロ、巫峽は45キロ、西陵峽は66キロです。岩の壁にはさまれて細くなった長江の流れは速さを増し、ところどころに暗礁が潜み、そこを船で下るのはかなりの危険を伴いました。ですから、皇帝が使用するような高価で貴重な物品は、陸路で運ぶのが通例でした。陸路にも蜀の栈道という昔から知られた難所があり、遠回りにもなることから、かさばる物の運搬は危険を冒しても船を使ったものです。私たちはこのときより3年前に科挙を受けるために都に上ったときは陸路を取りました。一度は天下の景勝を見ておきたいとの思いもあつて今回は長江を下ったのです。

昔から三峡の勝れた風光を想っていた。

今しもそれをほしいままに見てとれるところにまできた。

長江は蜀と楚そを結び、

蜀の山から出てきた万本もの川が一本に束ねられて、

楚の平地へと注ぎ込まれる。

東北からきた水は電光のようにすばやく走り、

西からきた水は藍に似た緑で、

その他のところからきた水はどれがどれだか見分けようもないけれど、

互いに勢いを競おうとここに集まってきた。

陸に道らしきものがなくなると、

いよいよ深い峡谷のなかに入る。

連なる山並みが一つの箱型の壁に変わり、

流れは、あるときは大きくゆるやかに巡り、

あるときはまっすぐに伸びて急流となり、

またあるときはぐっと縮んでどっと落ち込みもする。

風は呼吸をするように谷を行きかい、

雲の上へと吐き出され、あるいは下に吸い込まれる。

迫りくる崖は、

垂れ下がる緑の蔓、懸命にしがみつく青い竹、

それらもろともに、大きな音を立てて倒れかかってくるかのようだ。

滝となって落ちる水は吹雪のように宙を舞い、

石が駆け下る馬のように落ちてくる。

不意に絶壁の高さが不揃いになると、

忽然としてそのなかほどに子供の姿が現れ出た。

岩にまわりついて人家の煙が流れ、

山あいの小さな村の真下に船は着いた。

船をやっと繋げるだけの狭い岸辺から、

竹籠に乗ってその村へと登ってみた。

このようなどころにでも人は住めるもので、

粗末ながらも役所の建物があつた。

この地の名産という蜜柑を村の役人が勧めてくれるかたらず、

夕べの太鼓がどんとどんと鳴らされた。

村役はいささか誇らしげに、

寿命を延ばす薬草がここらではたくさん採れると教えてくれた。

しかし、食に満ち足りて十分に長生きをしているような人は見当たらない。

それでも、昔からのことがよく語り継がれて、

先人の苦労を大切に偲んでいるようだ。

家は板で屋根を葺いただけで瓦はなく、

巖を削り込んだだけのごく狭い住まいもある。

気候は冬も暖かであるというけれど、

薪を伐るにはかなりの危険を冒さねばならないだろう。

米を作るような土地はほんのわずかしかなく、

暮らしの厳しさは並大抵ではなさそうだ。

土地の人が舟を操る腕前はさすがにみごとで、

大波がどこで生じるのかすべてよくわきまえ、

木の葉のような小さな舟でかるがると大河をさかのぼる。

人々の矍鑠とした姿は見惚れるばかりだ。

残念なことに、言葉がよくわからないので、

私などはこの土地には住めそうになく、

ここの奥深い趣きを味わうには至らないだろう。

いましも一羽の鶺鴒こいが飛び上がり、

大河の上の百尺の厚みのある靄を超え、その上へと出て行った。

そして横に滑空する鶺鴒には、自ら心に得るものがあるように見え、

遠くに消え去る前に翻るのは、あえて楽しみを貪らぬまいとしているかのようだ。

悠々と翼を振るって雲間に遊び、

他の鳥のことなど気にもかけていないのだろう。

人の世は塵にまみれ、病んでいるのではあるまいか。

そこであくせくすることに私は耐えられるだろうか。

万物は自然の内に生きるよさを知っているのに、

人は富貴の喜びを優先させてしまう。

飛ぶ鳥の楽しみを見るがいい、

高くにあって心満たされているではないか。

——あれつ、もしかしてこの詩のことだった？ ほら、ジョン・クレアが抱いた

疎外感に近いものがトーバー君にもあったって言ったのは。そうだよね。

いまの詩にあつたように、万物は自然の内に生きるよさを知ってるのに、人間は違ふんだよなあ。人間が違ふつてことに無自覚な人は、富貴の喜びを優先して何とも思わないんだろうけど、人の世は病んでいると感じる人は、あくせくすることに耐えられないんだよ。なんかよくわかるんだけど、でも、こういう詩を作つたトバー君がどうしてちゃんとしたお役人になれたのか、不思議だよなあ。

㊦ ちゃんとなつていたのかどうか。本当にちゃんとなつていたら、たぶんあなたにお聞かせできるような詩はなかったでありますよ。

—あのね、この前、トバー君がジョン・クレアのことを話してくれてから、うちのおじさんに頼んで新しい詩集を買ってもらつたんだ。それで改めてジヨ

ン・クレアに惚れ直したんだけど、17歳のときにこんな詩を詠んでいたんだよ、ちよつと聞いてみてくれる。

17歳って、ボクが初めて「おれは、生きている！」に出会ったときと同じなんだけど、すごい人はそのころからもう違うんだよね。この旅のときのトバー君だって、ボクよりずっと若いんだもんな。ボクと比べるっていうのが、そもそも大笑いだってというのはわかっているけどさ。

人間的な法律を飛び越えてしまう呪わしい《財欲》よ、
ウエルス

お前こそが全ての害悪の源であり続けている、

《欠乏》の犠牲者、私のような惨めな貧民は、

自分たちの悲惨さを、あまりにも真実のまま、お前のせいにする、

お前こそが食べて行けないようにする障害物なのだ、
私たちが職を失い、パンを失うのもお前のせいだ、

(森松健介編訳、9ページ)

トバー君の「人は富貴の喜びを優先させてしまう」っていうのと同じと似
てるって思わない？ こじつけかもしれないけど、200年前も900年前も共
通するものがあるんだよね、きつと。

① ジョン・クレアの前ではいささか私は恥ずかしさを覚えざるをえません。ジ
ョン・クレアの純粹さが私にはありませんでした。世捨て人になるか、ちゃんと
した役人になるか、二つに一つということではなかったのですから。

——でも、「ゲンゲン、ミョウミョウ」で本質は一つではないって言ってたじゃん。
二つに一つなんてケチくさくてつまんないって。

㊦ 二つに一つではなく、互いに齟齬するようなことをしてきたのが六十数年の生涯であったのでしょう。それでもどうにか生きてこられたのは、たぶんサーフインの要領であったのではなからうかと思えます。

——ん？ サーフィンって、どういうこと？ 波にうまく乗るように、時流に合わせて調子よくやってきたってこと？ トーバー君って、そんな軽薄な人ではないように思うけど。

㊦ 波に逆らうサーファーはいません。しかし、うまく乗ってやろうと意志を働かせてうまく乗れるものでもないでしょう。来る波に巧まず我が身を寄せてこそ、すんなり乗れて、波の上での我が身の自由を得られるようになるのではないのでしょうか。海に立つ波はすべて一度限りのものです。まったく同じ波は二度とありません。自分の一つのやり方に固執しては、千変万化する波には対応できないでしょう。宇宙が始まってから初めて生じた一つの波に、無限のなかから選ばれたたった一つの波に、我が身を素直に寄せるのがサーフィンの極意というようなものではないでしょうか。人生も同じような気がします。

——ふーん、なんかわかるような、わからないような。サーフィンを始めてから、

ちっとは生きやすくなったって感じはあるけど、それはたぶん、波に向かっていると、余計なことを考えないでいられるっていうのがいいんだろうなっていうのがボクの理解なんだけど。サーフィンをして、シャワーを浴びると、なんかすっきりして、仕事上のあれこれなんかどうだっていいじゃんって気になるんだ。

㊦ 三峽はさすがに天下の奇観というだけあって見るべきものがたくさんあって、船がそこを通過する間にいくつもの詩が生まれました。順に一つ一つ取り上げて行くと、かなりの時間を費やすことになりそうです。今夜も話が長くなりそうですね、複数の詩から適宜抜粋して便宜上二つに合体してお話することにしませう。

峡谷に入ったばかりのころは断崖の奇観を喜び、

峡谷を出ようとするいまは、

広く平らかな大地が恋しくてならない。

ついに峡谷が終わるところにきて、

ずっと圧迫されていた心が、

ふっとのびやかに解放されて、

過ぎ去ったあれやこれや一気に思い返される。

峡谷は西から東へ千里にわたり、

風光の勝れたところが多々あった。

陸に見るべきところがあると聞けば、船を泊め、

遠くも高きも厭わずに、私は人々の先頭に立って訪ねまわった。

三峽の最初の瞿塘峽が終わると

すぐにあたかも鳴り物入りで巫峽が現われ出て、

連なる峰は怪しさ満載で、

岩の色はあるいは青くあるいは緑、

天の職人が神技を駆使して深く彫り込んだその意匠は、

いまも未完成であるらしく、

生々しい荒々しさにかたときも目を放すことができなかつた。

その巫峽には巫山の十二峰があると聞いた。

しかし、次から次へと迫りくる絶壁に怖気づいて、

八ないし九の峰を認め得ただけだった。

川の水の湧き立つようなところで、

この上の高みに神女廟があると聞いて、
岸边にしがみつくようにして陸にあがった。

上へと登って、岩に腰をおろすと、

ごうごうと音を立てて流れ下る大河の水がやっとわが身から離れ、
ほっと息をつくことができた。

するとにわかには鳥が騒ぎ出した。

次から次へと峡谷の両側の壁から湧き出したかと思うと、

船から高く投げ上げられた餌を目指し、

その一点へと無数の鳥が集中した。

鳥は神の使いとしてすっかり人に馴れている。

神女廟に詣でての帰り道で、冷たい泉が湧いているのを見つけた。

手にすくうと、青くきらきらと光り、

まことに愛すべき水だった。

巫峡の終わりぎわには、

崖にぽっかりとあいた空洞のようなものがあった。

真下から見上げると青い空が覗けた。

そこは石づくりの古い孔子廟で、

木と木を結んで中空に鉄の欄干がかかっていた。

その高さは何丈あるとも知れず、

下にはめまぐるしく姿を変える波があるのに、

そのようなものを誰が架けたのだろうか。

巫峡を下り切ると、その勢いのままに船を走らせ、

はとう
巴東県では泊まらなかつた。

巴東は若き日の寇準こうじゅんの任地だ。

寇準は峡谷のなかほどのこの寂しい土地にくると、
もっぱら民衆のために励み、

人々に賦役を課さなければならぬときになつても、

責め立てるようなことはしないで、

納めるべき人の名を記した板を役場の門に掲げ、

自分から納めにくるのを待った。

寇準が植えた松がいまもあつて民衆が大切に守つていふという。

山と川の織り成す自然の厳しさが、

豪俊な寇準を養い育てたのだらう。

三峡の最後は西陵峡で、

そこに入って三十里、

山の裾を船が回りかけると、

まだ見えてこないうちから、

私は驚きに打ちのめされた。

白い波が川幅いっぱい湧き立ち、

まるで雪の城壁が山の高さにまでせり上がってから、

深い谷底へと下り落ちるのだった。

いかなる魚もそこをさかのぼることはできないし、

いかなる鳥もそこに近づぐことができない。

そのような急な瀬を通過するのに、

船を操る人の腕前などはあてにできないから、

酒を供えて神様に無事を祈った。

こともあるうに、そのときいきなりひどい風にあおられ、

船はにっちもさっちも進めなくなった。

始めは北の崖から扇であおぐくらいの風が吹き降ろしていただけだったのに、

びゅうっとひとたび川面を疾走するや、

雲が右に左にびゅんびゅん飛びかかって峡谷をたちまち塞ぎ、

ばしばしと船の窓に雪が打ち付けるまでになった。

手近な岸边に纜を短くして船をしっかりと繋ぎ、

それからのひと晩は、

ぎしぎしと船体がきしる音に大いに悩まされた。

昔から、悪い天気も明け方までと言うのに、

朝になっても風雪は少しもおさまらなかつた。

これはここを司る神様が遠来の客を大いに歓迎して、

長く引き止めようとの有難い厚意だったのか、

結局は三日間もいつくことになった。

仕方なく船から上ってそこの村を訪ね、

土地の酒を買い求めて飲んだのが唯一楽しいことであった。

幸いそこも抜けられて、こつた黄牛廟こうごうびやうの下にまでくると、

「ここらはどうも岩の壁、道などありはしません」

船頭がそう言ったので、廟を遠く見上げるだけで通過した。

次に、たつ玉虚洞という立派な洞窟があると聞いていたところまでくると、

「ここらはどうも岩の壁、道などありはしません」

船頭は同じことを言ったので、これはどうやら、

坂が険しかろうが道が遠かろうが、

一切構わずに私がずんずん行ってしまうので、旅路は何かと遅れがちで、

船頭があきれて適当なことを言っただけなのだろう。

しかし、船というものは船頭に任せるしかないので、

玉虚洞はその晩の夢で訪れてすませたのだった。

このような次第では、

無数にある三峽の奇偉を幾つ見逃したかわからない。

かくて重なる危険を無事に脱し、

ついに今朝は広くゆるやかな流れを目にすることになった。

ここから先は魚が豊富でうまいというから、

順風にも恵まれて旅はますます楽しくなることだろう。

——へーえ、トバー君って、なんかいつつも楽しそうにしているみたい。楽道家というか、エピキュリアンなんだろうね、正しい意味でのだけど。

㊦ エピキュリアンって、このごろでは珍しい用語を使いますね。あなたはひよっとしてエピクロスの哲学に詳しいのですか？

——いえ、いえ、そんなことはぜんぜんないよ。「隠れて生きよ」とか、自由意志はどこからくるのかとか、そんなことに少しだけ興味があつて、ほんのちよつと

読んだだけ。それに、正しくない意味でのエピキュリアンには、なんか背徳の香りがあがるから、興味をひいたっていうのもあるかもね。

㊦ ここでエピクロスの哲学について語ると脇道に入りすぎなので、エピキュリアンとの評はあながち見当はずれではないと言うに留めて、詩の途中で名前を出した寇準について少しだけ説明を加えておきたいと思えます。聞いたことのない人で興味もないでしょうけど、私にとって偉大な先輩であります。

寇準は私よりほぼ100年早くに生まれました。あなたにとって100年前の先輩という^{いしかわたくぼく}と、たとえば石川啄木^{たけひさゆめじ}とか竹久夢二^{ろじん}、あるいは魯迅^{ろじん}といった人になるでしょうか。先輩というよりは、大昔の人という感じでありましようか。

——そうだなあ、先輩っていうとボクと関係するところがあるって感じになるけど、いま挙げてくれたような人は、遠く離れた人って感じかな。時代背景も大きく違ってしまったしね。ジョン・クレアよりはずっと近い人たちんだけど、距離感はあるまし変わらないかも。トバー君とも変わらなかったりして。

㊦ 私たちの時代は比較的社会が安定して、100年の隔たりも短く感じられたということもあったかもしれない。寇準はその社会の安定に偉大な貢献をした人でした。

寇準は20歳で科挙に合格し、44歳で宰相になりました。期待の俊英で、実に早い昇進で、宰相になったまさにその年に国家存亡の一大危機に遭遇し、そこに寇準がいなかったならば、宋という国は領土の半分を失うか、下手をしたら滅

びてしまったかわかりません。寇準はそれほど大きな存在でした。

前回、富弼の用兵論をお話しました。そのとき遼国りょうこくは平和条約を破棄して領土の割譲を要求してきたのですが、その平和条約を結んだときの立役者が寇準でした。少しさかのぼってお話しますと、宋は建国以来、遼国との間でずっと戦争を繰り返してきました。おおむね遼国が優勢で、寇準が宰相になった年に、遼国は最終決着を付けるべく大挙して攻め入ってきました。時の皇帝は遼軍の勢いに恐れをなし、都を明け渡して遠くに避難しようとして心にはほぼ決めていました。寇準はそれでは国が滅んでしまいかねないと、皇帝を都から引つ張り出し、逆に敵の真正面へと連れて行ったのです。前線の兵士は皇帝を迎えたことで士気が大いに上がり、遼軍と互角以上の戦いをしました。遼国は戦争が長引くのを嫌って和平交渉に応じ、宋が遼に小遣いを与えることで和議が成り立ちました。これで遼国の

軍事的脅威が除かれ、宋の民衆は平和を享受できるようになったのです。

寇準のような人が出たことで、人材登用の手段として科挙が優れていることが完全に証明され、科挙の合格者が国家の重要な役職に就くという流れが決定付けられました。家柄によらずに実力で宰相にもなれるというのは、当時の若者に大きな希望をもたらし、宋の社会は大いに活気づきました。実際に、その日の食べ物にも困るような少年時代を送った者が立派な宰相になるというようなことが相次いで起こったのです。

——そういうのって大事なんだよなあ。いまの日本なんかは二世、三世の議員がごろごろしてるもんなあ。親の七光りのない普通の若い人は非正規雇用ばかりだよ。格差が広がって、それが固定化されつつあることに、二世、三世たちは全く

無頓着というか、むしろ是認しているみたいなどころがあるよ。どっかの党の憲法改正案で家族を大切にとか言ってるのは、家柄が幅をきかす社会にしたいってことなんじゃないかって思っっちゃうよなあ。

㊦ 寇準はものに動じないまことに剛直な人で、国家の危機には大黒柱として実に頼りになったのですが、平穩無事ということになると、なんとも煙たい存在となり、そこにうまく付け入って皇帝との信頼関係を引き裂いた政敵によって罪に陥れられ、晩年は都から遠くに離れた雷州らいしゅうというところに流され、その地で没したのです。雷州は、実は私が62歳で流された海南島とは海を隔てた向かい側の大陸の端の地で、私が流された同じときに我が弟がまさしく雷州に流されたのです。寇準と同様の運命がこの先に待ち受けているとはむろん知るべくもなか

った私は、山と川の織り成す厳しい自然が豪俊な寇準を養い育てたと、「江山こうざんを養うやしん」と詩に詠んだのでした。私もその後、江山によって養われはしたのでしょうが、見ての通り、「豪俊」にはならなくて、むしろ文弱の度合いが増してしまっただけのようです。

——でもさあ、トバー君はトバー君なりに「豪俊」ってことなんじゃないのかなあ。ただ強いだけの人だったら、ボクなんかとこんなふうには話をしているはずがないよね。

㊦ 蜀の文化風土と関連して、ついでに言っておきますと、遼が攻めてきて皇帝ていが都から逃げ出そうと思っていたときに、ある蜀人の先輩は、唐の玄宗皇帝げんそうに習

つて蜀に避難するよう皇帝に勧めました。玄宗皇帝はご存知でしょうか。若いときは名君でありましたが、50歳を超えてから有名な楊貴妃ようきひという美女に首ったけとなつて政治を忘れ、安祿山の反乱を招いてしまいました。玄宗皇帝は反乱軍と正面から戦うことを避けて蜀に逃れ、結果としては唐王朝の命脈を保つことに成功しました。寇準は、先例に習うのも時と場合によると、避難を勧めた我が蜀人の先輩を口を極めて罵りました。

宋国は黄河流域こうがのいわゆる中原ちゆうげんに興り、長江から南の地や蜀の地を順次征服して天下統一を成し遂げました。宋のもともとの地域の人々を北人ほくじん、後から支配された地域の人を南人なんじんといい、軟弱な南人に国の大事は任せられないとの意識が北人には強くありました。寇準は北人の典型で、このときに南人はやはり駄目だと強く思つたのでした。後に寇準を陥れた政敵の中心人物は蜀人ではありませんんで

したけれど南人でした。

寇準から100年を経た私の時代になると、北人と南人の対立はかなり薄まりましたけれど、広い中国ですから地域による文化風土の差異は解消されませんでした。不本意ながらも、私は地域対立の渦のまさに中心に立ってしまうことになりました。それはずっと先の話です。

——なんか、後でっていうのがたくさんになってきて、伏線をむやみと張った面倒くさい推理小説みたいになってきたかも。あんまりあれこれ多いと、みんな忘れちゃうよね。

①

もう一つだけ言っておきますと、私が海南島に流されたときに、私たち兄弟

は雷州まで一緒に旅をし、その途中で、あのねずみ男のラーメンに優るとも劣らぬまことに美味しい湯餅タンピンを食べたのです。そういえば、あのラーメン店にはあれから行っていないませんが、こんどまた食べに行きませんか。

——うっそお。あのふやけた千歳飴うどんはもう勘弁せんぞうなんだけど。

㊦ だけど、あの店に行くと、変わったことが起こりそうな気がするのです。そうは思いませんか。

それはそうとして、三峡を出ると長江はにわか流れが緩やかになり、船足ものんびりとして、ゆるゆると夷陵いりようという小さな町に到着しました。夷陵は4人のスーパーヒーローの1人、欧陽脩おうようしゅうが若いときに流されたところでした。

夷陵は長江の中流域に位置することから、

その昔は、戦略的に重要な場所とされた。

平和な時代になると、

この地から英雄が出るということはなくなり、

地方の小さな県というだけになった。

そこにひょんなことから、

文学上の勇者が都から流されてきて、

このあたりを歩いては詩を詠み文章を書いたので、

一躍、夷陵の名がまた高められた。

その人がここを去ってから幾年もが経ち、

その人が住んでいた至喜堂がややもすると傾いてしまうのを、

土地の人は毎年きちんきちんと修繕している。

その人が植えた橘は霜にあたって枯れたけれど、

その人が植えた楠は大きく立派になっている。

土地の人は私たちに尋ねた。

「うちの長官様はもう髪がまっしろでしようなあ」

「ええ、ええ、その通りですとも。」

何しろ自分の楽しみなど少しもなしに、

国のために年がら年中頭を悩ませて文章を作っておられるのですから」

というわけで、土地に人に代わって、

先生に遠く言葉を寄せさせていただきます。

「たまにはゆったりなさって、

お酒でも召しあがるのがよろしいのではありませんか」

「文学上の勇者」が欧陽脩です。欧陽脩は私より30歳上で、我が父より2歳年長でした。4歳で父を喪い、少年時代は苦勞の連続で、母が地面に枝で字を書いて教えたという有名なエピソードがあります。24歳で科擧に合格し、その才能に惚れ込んだ人のお蔭で、中央政界において順調に出世の階段を昇り始めました。貧苦の母子家庭から飛躍を遂げたのは宋の時代ならでのことです。

欧陽脩は29歳のとき、あえて火中の栗を拾う行為に出て、夷陵に流されました。おとなしくしていれば何事もなく昇進できていたはずなのです。当時、皇帝の信頼があつく、長年にわたって宰相の地位にあった人がいました。その宰相こ

そが国政を停滞させている張本人であると、4人のスーパーヒーローの一番手であつた范仲淹はんちゆうえんが激しく批判しました。宰相は怒り、范仲淹を都から追い出しました。これは欧陽脩には全く関わりのない事件であつたのですが、敢然と范仲淹の弁護に乗り出したのです。欧陽脩は弁が立ち、それ以上に名文家でありましたので、宰相としては容認できず、都から遠い夷陵にほうり出したのでした。

夷陵に着いた欧陽脩には、古びてぼろぼろになつた官舎が住まいとしてあてがわれました。権勢をほしいままにふるう宰相にいらまれた人物を、土地の役人が粗略に扱うのは当然のことでありました。そこにこのあたりの地を広く治める州知事の朱慶基しゅけいきが訪ねてきて、住まいがあまりにも粗末なのを見ると、官舎の東隣りに趣きのある小堂を私費で建てて欧陽脩にプレゼントしました。それがいまの詩のなかで触れた至喜堂です。

至喜堂については、朱知事への感謝の思いを込めて欧陽脩が記した文章がありますので、概略をご紹介しましょう。

夷陵は大河のほとりの町で、山椒、漆、紙などの産物があることはあっても、自給自足の域を出るものではなく、民俗はひどく田舎じみて、四方に優るようなところはこれといてない。市で売られているものを見ると、せいぜいが土地の者の食べる魚や貝くらいで、れっきとした商人がここに商いにくるようなことはない。まことに辺鄙な貧しい町であるから、馬車が通れるだけの幅の広い道とてなく、州知事が市場の視察にやってくるまで、地面に降り立って、魚や貝の半分腐ったような臭いに鼻をおおいながら、自分で歩かなければならなかった。

朱公（朱慶基）は州知事となって、夷陵のこのようなありさまを見ると、町の区

画整理をして、茅や竹を葺いただけで火事の多かった人々の家を瓦葺に作り変えるなどの事業に着手し、それを成し遂げた。

私が罪人となってここにやってくると、朱公とは旧いよしみがあったので、わざわざ様子を見にきてくれただけでなく、官舎の東に清潔で明るい家を建ててくれて、そこで心を休めるがいいと言ってくれた。家が完成すると、朱公は人々と連れ立って落成祝いをしてくれた。

罪人は悪地に棄て、ひどいところに住まわせ、憔悴させ、憂いに沈ませ、自らを悔い、自らを咎めるようにさせるべきである。ところが、私は朱公のおかげで、よい土地にきて、よい住まいを得て、安楽に過ごして、罪を犯した憂いなどはすっかり忘れてしまった。流された主旨とはまったく異なることになったのだった。

夷陵から陸路を使うと、けいしゅう荊州を経てじょうよう襄陽を経由し、都まで二十八駅ある。水路を

使うと、長江を下って、淮河わいが、汴河べんがを結ぶ運河を通して都の東の水門まで五千五百九十里ある。だから、官吏となった者は遠くのこんなところには赴任したくない。一度赴任すると任期が満ちても代わりの後任がこないの、仕方なく官職を棄てて去るといふことにもなる。

しかし、夷陵の風俗は実は純朴で、盗人はいないし、争いごともない。米と魚は食べるに困らないだけあるし、橘、柚子、茶、筍といった四季の味も揃っている、その上、川も山も美しい。住まいがきちんと整っていきえすれば、ここを愛さずにはいられなくなる。これはただ罪人が憂いを忘れるだけではなくて、官吏たる者はここにきて楽しまないということは決してないはずなのである。だから、すでに至れば喜びがあるといふことで、朱公は私の住いに「至喜堂」と名付けてくれた。

——ふーん、これって、渋い感じのちよつとした文章かもね。欧陽脩を流した宰相は、これを読んで、悔しがったりしたんじゃないの？ 苦しめてやろうとしたのに、楽しんじゃっているんだから。

㊦ 欧陽脩は精神的に強靱であったので、火中の栗を堂々と拾い、遠く流されても楽しみを見出せたのでしょう。一方の宰相も、批判されてしかるべきところはあっても、人間としてはなかなかスケールの大きな人でありましたので、このくらいの文章でとやかく言うことはありませんでした。

欧陽脩にはもう一つ、夷陵について書いた文章があります。私たちの船旅がどのような性格のものであったのかを知っていたくによさそうなので、その概

略も紹介しておきたいと思えます。

蜀は先の時代には険しい地形を頼みとし、豊かな産物をもって自足し、国の中央と通じないこと五十九年に及んだ。宋が天命を受けて中国の統一に乗り出すと、四方は順次平定され、蜀もついには宋に従うようになった。以来、蜀の豊かな文物が天下に広まり、公の輸送、民間の商売による往来がさかんになった。陸路では秦州しんしゅうないしは鳳州ほうしゅうから、水路では岷江びんこうをさかのぼって、万里の外から蜀へと人が行くようになった。

岷江は蜀のさまざまな河川を集めて三峡に流れ込む。三峡に入った大河は傾いては折れ曲がり、回っては真直ぐになり、あるときは怒りを含んで激しく闘い、あるときは水を束ねて急流になり、あるいはよじれて旋回する。そのような流れに

乗った船は目にも及ばない速さで百里を下り、わずかな失敗でもあろうものなら、崖に激突して跡形もなく消えてしまう。だから、蜀の物産で皇帝が必要とするような貴重な物は陸路で都に運び、そのほかの不測の事態で失せてもよいようなものを水路で運ぶのである。

夷陵は三峡の出口に当たり、長江はここにきて初めて流れが緩やかになる。船に乗った人は、ここに至って生き返ったように感じ、神に酒を捧げて感謝し、互いに祝福する。

朱公は、長江を下ってきた舟人が休息できるように、夷陵の船着き場に至喜亭を建てた。「至喜」とは天下の大險もここに至って初めて平らぎ、舟人も旅人も喜び、という意味である。

夷陵はもとより都を離れた僻遠の地で、赴任する官人の給与は低い。この地にく

ることは誰も名誉とはしない。朱公は少しも厭わず、自ら心を安んじて善政を行っている。そのことが遠い都に伝わらないのを残念に思い、私はこの文章を記した。

朱知事が立派なのは、欧陽脩のために至喜堂を建てただけでなく、この文章にあるように、長江を行き来する人々のためにも至喜亭を建てたことでした。

——同じ「至喜」でも至喜堂と至喜亭では少し意味合いが違ってたんだね。

それはいいんだけど、欧陽脩は「文学上の勇者」って言ってたけど、いま聞いた二つの文章は、トバー君がやさしく翻訳してくれているからってこともあるんだらうけど、なんかごく普通の短いエッセイで、「文学上の勇者」が書いたって

感じはとくにないんだけど。

㊦ まさにその通りです。そして、それこそが最も肝心なところですよ。私は日本語のネイティブではないので、日本語の凝った表現は使えません。私の詩でも欧陽脩の文章でも平易な日本語にしか訳せません。そうだから、いま聞いていただいた欧陽脩の文章がごく普通のエッセイにしか聞こえないのではなくて、もともとの文章がごく平易でごく普通なのです。

今夜は三峽を出てほっとしたあたりで区切りにしようかと思っていたのですが、欧陽脩について語らなければいけないとの思いがいま心に内に湧き立ってきました。いましばらくお話するのをお許しただけです。よろしいでしょうか。

——話したいことがあるのなら、気がすむまでどうぞ。どうせボクはテキストに聞いているだけだから、なんなら、閉店で追い出されるまで続けてくれたって構わないよ。明日は遅番だしね。

㊦ さきほどの詩で、欧陽脩の白髪について詠んでいましたけれど、これはいわゆる楽屋落ちの類いです。欧陽脩の髪が白いのはよく知られていて、日夜奮闘したせいで白髪になったのではなくて、夷陵に流された二十代の終わりのころからすでに白いものがかなり目立っていました。私が初めて欧陽脩と会ったのは五十歳のころで、総白髪といつていくくらいでした。風格があり、「文学上の勇者」から「文学上の改革の偉大な指導者」になっていました。

——えーと、「文学上の改革」っていうのは、ロマン派から自然主義に変わるみたいな感じのこと？ 関係ないけど、ジョン・クレアは最後のロマン派詩人と言われたりしているみたいだけど。

Ⓣ 誤解されることをむしろ期待して言いますと、欧陽脩の改革は、耽美主義から写実主義でありましょうか。

時代を少し飛ばして、このときの旅から13年後に杭州こうしやうという町で役人勤めをしていたときの私の詩を聞いていただきましょう。科挙の一次試験の実務を担当させられたときの詩です。

一次試験は全国各地の大きな町に受験生を集めて行われ、それに合格すると都で行われる二次試験、三次試験に進むことができました。一次試験は地方都市に

とって一大イベントで、大変に神経を使う仕事でした。試験の関係者は、試験期間中は合格発表がすむまで、外界との接触を完全に遮断された場所に集められ、隔離状態に置かれました。一切の不正の入り込む隙をなくすためです。それ以前にも一次試験の業務に携わったことがありましたが、私の性分からいって、閉じ込められるだけでもうつとうしく、このときはさらに別の事情もあって、この仕事がいやでいやでたまりませんでした。そのような心情を任務とともにする心ある同僚に明かしたという詩です。

私は山のなかで育った人間でありましたから、
受験のための勉強には苦勞したものです。

練習を重ね重ねて、ようやく少しばかりの文章が作れるようになって、

右から左にすぐに抜けてしまいました。

その上、ここ十年はもうすっかり怠けていましたから、

もしもいまさら受験生の仲間入りでもしようものなら、

大昔に落第者にはそんな罰があったように、

きつと墨汁を飲まなければならないでしょう。

こんな私に試験監督の仕事がまわってきたらどうしたらよかろうかと、

ずっとひやひやものでありました。

ここは我が田舎とは打って代わって繁華な都会で、

才能のある人であふれかえっています。

なにしろ、そこらに生えている雑草でさえよい香りがし、

貧しいといわれる家でも真珠くらいはざらにあるという、

まばゆいばかりの土地柄であります。

まばゆいといえは、文章もかつては目もくらむばかりでありました。

黄金を細かく砕いて散りばめてみたり、

鮮やかな錦をやたらとくっつけてみたり、

見た目の奇抜さを求めて調和なんぞはどこへやら、

気取り過ぎてまともに歩けないようなありさまでありました。

わいわいキャーキャー群がる雑魚どもが、

本物の竜が現れ出て初めてびっくりするように、

このときまで格好だけを気にしていたシティーボーイどもは、

欧陽脩の出現にびっくり仰天したのでありました。

正しい音を耳にしなければ調子っぱずれのまま歌い、

正しい味を口にしなければゲテモノでも食べていられるように、

欧陽脩がいなかったならば、

いまでも平気で装飾過多の意味不明の文章を書いていたことでしょう。

欧陽脩のお蔭で正しい文章が千年にわたって伝えられると思ったのは束の間、

誰かさんが変革とやらを言い出して、

人を評価する秤に目盛りはいらない、

本当の味を知るのに肉は煮なくていい、

ちまちましたルールで文字を並べる詩など作らなくていいと、

高邁すぎる御説を開陳し、

孔子先生が講義をする教室でも、

昼寝をしていたって構わないというようになくなりました。

そうした新潮流のもとでの試験であります。

私のような鈍い愚か者は、

新しい芸当はいまさらとても身に付けることができませぬ。

皆さまは才能ある傑人でありますから、

不細工である私がこのようにぼやくのをどうかお許しく下さい。

時に秋の心地よい午後でありますので、

私も昼寝するといたしましょう。

——えーと、よくわからないなりに、いま聞いたところから推測すると、試験のやり方に関して気に入らないことがあって、やっぱり、いつもの口の悪さというか、皮肉な感じの詩を作ったってことかな。

㊦ このとき、実は欧陽脩が亡くなったばかりでした。欧陽脩が懸命に取り組んだ文学の改革、それと連動した科擧の改革とはまるで異なる方向に試験制度が変えられてしまって、不本意ながらそれを実施する側に身を置くのがつらくて、業務を放棄して昼寝でもしていたいと詩に詠んだのです。私も役人の端くれでありましたから、与えられた仕事はきちんとこなさなければならぬということには十分に心得ていました。自分の考えとは異なっているとしても、国の制度として決まったこと、あるいは皇帝に命令にはきちんと従わなければなりません。一人ひとりの役人がそれぞれの一存で勝手なことをしたのでは国家は成り立ちません。だから、詩には昼寝をすると詠みましたが、実際には忠実に任務を果たしました。それでも、黙っていることまではできずに、詩を詠んだということなのです。

——えーと、いまの詩を聞いて、耽美主義から写実主義と言っていたのと合わせ推測すると、かつては文章をやたらと飾り立てる風潮があつたのを歐陽脩が改めたらしいってことはわかったんだけど、それは事実に基づいた平明な写実的な文章を書くってことだったの？

㊦ まさしくその通りです。かつては、凝りに凝って「気取り過ぎてまともに歩けない」までに飾り立てた文章を作れるのが名文家であるとされていました。歐陽脩は一切の飾りを排し、一読してすつと頭に入ってくるような平明な文章、つまりはごく自然な歩行を提唱したのです。気取った歩き方ができるのを優れた技能と見るか、自然のままの歩き方をするのを優れた技能と見るか、あるいはどち

らを美しいと見るのか、その違いです。誰もが自然の歩き方ができるはずと思っ
かもしれませんが、人は歩くとき意外と癖があるものです。自然に歩くには、そ
れはそれで練習が必要でしょう。ごく普通の文章を書くには、実は気取った文章
を書くよりも練習を必要とするのかも知れません。欧陽脩その人も、何度も何度
も書き直して、ようやく最も平明な文章にたどりつくのを常としていました。

——それで、誰かさんが変革に乗り出したっていう、そっちの変革はどういうこ
とだったの？

㊦ それは文学上のことではなく、科挙で何をみるのかということの変革でした。
単純化して言うと、優れた文章が書けるとか、優れた韻文が作れるとか、そっ

うことを科挙の試験でみる必要はないということになって、さつそく試験科目から詩賦がはずされました。そして、知識量を問うことにより重点が置かれ、それもいずれば古典の知識より実際の法規などの知識を問うように変えて行く方向性が出されたのです。

——へーえ、そうなんだ。科挙って官僚になるための試験なんだから、それはその通りでいいんじゃないかって気がするけど。だけど、トーバー君は気に入らなかつたんだよね。どうして？

㊦ 現代の司法試験では、俳句や短歌を作らせてみたり、『論語』について尋ねてみたりはしませんから、あなたの受け止め方はごく当然のことだと思います。

科挙の新たな改革の提案がなされたときに、私はそれに反対する文章を書いて皇帝に差し出したと言うと、きつと奇異に感じるでありましょう。

反対意見のなかで、政治の実際において詩賦は確かに不要ではあるけれども、詩賦に優れた名臣は唐の時代から数知れずいるのだから、敢えて長い伝統を変えて試験科目からははずすには及ばないという主旨のことを書きました。

——ん？ それって、なんか話がずれてない？ より優れた試験制度にするという議論になっていないよね。なんか伝統を守るだけの保守的な感じがするけど。トーバー君ってそういう人だった？

① 私はずきましく保守的な意見を提出しました。それはようやく手にしたばかり

のものを大幅に変えることには慎重になるべきだとの考えからでした。

中国では遠い昔から、どのような仕組みを作ったら、優れた才能を見出して、それを活かすことができるようになるのか、試行錯誤を重ねてきました。少数の支配階級が多数の人民を統治する身分制社会では、優れた才能のほとんどが埋もれてしまいます。支配階級でも被支配階級でも優れた才能の出現確率が同じならば必然的にそのようなことになるでしょう。優れた才能が活かせない社会は沈滞し、劣化し、滅びるよりありません。科挙は人材登用の画期的な方法として隋ずいの時代に始まり、唐の時代に大々的に導入されました。しかし、唐の時代には貴族が科挙に大きく介入し、合否を左右し、合格しても気に食わない人間は官僚として採用しませんでした。私たちの宋の時代に至ってついに科挙は完全に実力制となり、実際に寇準のような人が出たのです。欧陽脩の改革はそれに磨きをかける

方向性のものであったのですが、新たな改革はかなり異なる方向性を志向していました。現代の感覚からすればそれが正しいと見えるでしょうけれど、私は時期尚早で、なおかつ危険であると考えていました。二つの方向とは、端的に言う、人間性を見るか、実務能力を見るかです。

ところで、あなたは就活時に、ジョン・クレアの詩を学んだことについて問われて、難儀したのですよね。イギリスの詩に入れ込むような人間にまともな仕事ができるのかと、そういう目で見られていると感じたのではなかったでしょうか。

——いまから思うと、そういう視線を感じてむかつき、むきになって答えようとしていたのだろうね。大学で学んだことと志望動機の関係を聞かれて、「関係ねえよな」って頭から決めつけられてイヤミを言われているような気がして、勢い込

んで答えたんだけど、それがこじつの論法でしかないってことは話しているボクが一番よくわかっていた。考えてみたら、イギリスの詩じゃなくても、大学で学んだことと仕事が直接に関係しそうでないってことはよくあるんだから、むきになるようなことではなかったんだよね。ボクにはジョン・クレアの詩の詩に入れ込んでいたことに、なんか後ろめたいようなところがあつたんで、過敏に反応したんだろうね。そもそも大学に行くときに、「そんなの勉強してなんになるの？」って、母親ともめたしね。まあ、いろいろあつたってことさ。

㊦ でも、ジョン・クレアの詩に魅かれるような鋭い感性が、仕事上きわめて大切であるという局面だつてあるのではないでしょう。感受性が鈍い人なら素通りしてしまうことに、あなただけは気付けるといふことがきつとあるのではあり

ませんか。

——そういうことがあつたらいいとは思うけど、どうなんだろう。実際には、人と感じ方が違って、うまくいかないってことの方がボクには多かつたりするだよなあ。

㊦ 欧陽脩が目指した文学の改革は、さきほどからのたとえで、ごく自然な歩行をすることです。自然に歩行する姿は美しいばかりでなく、そこにはその人の人間性がにじみ出てくることにもなるでしょう。逆に言うと、全人格がにじみ出てくるような文章や詩を作ることを欧陽脩は目指したのです。飾り立てるのは人間性を覆い隠すことになりはしませんか。

人間としての基本がしっかりとしていれば、何か問題が生じたときに的確に状況を把握して解決策を見いだせるでしょうし、チームを束ねて事に対処することもできるでしょう。そのような人であるかどうかを試験で課した文章や詩賦の出来栄えから見抜こうというのが、歐陽脩の目指した科挙の改革でした。それ以前の科挙も人間性の重視ということでは基本的に同じだったのですが、規範とする文章観が、採点を公平にするという技術面からの要請もあって、いつしか装飾過多へと傾いてしまったのでした。

——だったら聞いてみたいんだけど、トーパー君は第6位で合格したって言うんだけど、そんなときにはどんな感じの答案を書いたの？ トーパー君の人間性がどう出てたの？

㊦ それをお話すると、自慢話みたいになりかねないのですが、私たち父子と歐陽脩との間には浅からぬ縁があったという話としてお聞きいただければと思います。

前回、あらぬ噂で蜀の人心が乱れたために張方平が派遣され、それをきっかけとして父のことが都に知れるようになったと申し上げました。都の人々のなかで、父が書いたものを最も高く評価してくださったのが他ならぬ歐陽脩でありました。歐陽脩の文学の理念とまさに合致していたからです。

父は科擧に失敗しています。「気取り過ぎてまともに歩けない」ような文章をよしとするような試験が続く限りは自分は合格できないと、父は半ば絶望し、半ば反発して郷里に帰り、学問はいかにあるべきかを深く探究して、歴史から人間社

会の基本原理を抽出して現在の問題に応用するという基本公式を生み出しました。その公式に則って、具体的にいろいろなテーマに関して論文を書き、思索を錬り上げて行く過程で、欧陽脩とほぼ同じ文学観にたどり着いたのです。父は欧陽脩に強く勧められて上京し、私たち兄弟も同行し、都で科挙の一次試験を受けたのでした。

そして驚くべき偶然が働いたのでした。一次試験に合格した次の春、すなわち嘉祐元（一〇五六）年春に実施される二次試験の総監督に欧陽脩が任命されたのです。国として欧陽脩の文学観のもとで科挙を実施すると決めたのでした。試験は厳正に行われ、総監督であっても特定の受験生を最優先するようなことは絶対にできません。しかし、問題と採点基準には大きな影響力を及ぼすことができます。欧陽脩が総監督になると発表されると、「気取り過ぎてまともに歩けない」文章を

書く練習を積んできた受験生に大きな動揺が走りました。二次試験の合否判定ががらつと変わるかもしれないというので戦々恐々となったのです。科挙は二次試験までありましたけれど、三次試験は皇帝が直接に行つて最終順位を決めるためのもので、ある時期から三次試験では不合格者を出さない決まりとなりました。ですから、二次試験の結果が最も重要だったのです。

私たち兄弟は父の教育方針もあつて、過剰に技巧を凝らす文章を書く練習はあまりしていませんでした。とくに私は弟よりも不得手でありましたので、旧来通りの試験であれば父と同じ道をたどったかもしれません。歐陽脩のもとで二次試験が実施され、その結果が発表されると、私たち兄弟は合格し、旧来の文章術において名手とされ、合格間違いなしと見られていた受験生は軒並み落第となりました。いまでいうと模試でベストテンの常連だった者が本番で全員不合格となつ

たようなものです。落第生は怒り、歐陽脩の私邸を囲んで抗議デモをするという騒ぎになりました。

——へーえ、大変だ。でも、デモなんかがあったんだ。昔の中国でも、そんな自由なところがあったんだね。

㊦ このときのデモは抗議の声を挙げるだけの比較的穏やかなものでありまして、たけれど、デモがエスカレートして、家に石を投げ込んだり、路上で要人を囲んで吊るし上げたり、さらにもっと過激化したりすることもありました。あまり激しくなると、権力側が力で排除するということになるのですが、科擧の受験生は将来の官僚の候補ですから、社会のなかでとても大切されていましたので、こ

のときのデモ参加者はお咎めを食らうということもありませんでした。ただし、試験の結果が見直されるということはありませんでした。

——じゃあ、欧陽脩が総監督になったおかげでトバー君は6番で合格したってことだね。

Ⓣ 6番は三次試験の成績で、二次試験は2番でした。実は本当は1番だったのです。嘘みたいな話ですけど、最後になって1番と2番が入れ替えられてしまったので、私は2番になったのです。

——えっ、どういふこと?

① このときの二次試験は3日ばかりで行われ、1日目は古い経典をどれだけ正確に覚えて理解しているかを問う試験で、主に記憶力の勝負でした。2日目が詩賦で、出された題に対して詩を一つ、賦を一つ作りしました。3日目が「論策」で、あるテーマに関して小論文を書く「論」と、政治上の対策を書く「策」がありました。欧陽脩の新しい文学観が最も反映されたのが「論」でした。

この時の「論」の課題は『刑賞は忠厚の至り』について論じろ」というものでした。「刑賞は忠厚の至り」という古い言葉があり、その今日的意味を論じろということです。「忠厚」とは真心と訳すとよいでしょうか。刑や賞を民衆に与えるときに為政者は真心の限りを尽くさなければならないというような意味の言葉で、要するに、国家が民に賞罰を与える本質は何かという設問であったのです。私は

父の基本公式に則って、歴史から本質を抽出して、答案をまとめました。細かいところを省くと次のようになるでしょうか。

大昔の理想の天子は、民を深く愛し、民を切に思いやり、人を尊重することを基てんし本として天下を治めました。一つでも善い行いがあれば、それを賞した上で、歌って讃えたので、人は楽しんで善行を始め、最後までそれに努めました。逆に一つでも悪い行いがあれば、それを罰した上で、憐れんだので、人は悪いことはやめて、善いことをしようとなりました。

このような言葉がありました。「賞を与えるべきか疑わしく思ったときには与えるのがいい。恩愛を広く民に及ぼすことができるからだ。罰を与えるのを疑わしく思ったときにはやめておくのがいい。刑を慎むことができるからだ」。実際に聖天

子の堯ぎょうの時代にこのようなことがありました。皋陶こうとうという人が死刑を行おうとして、執行を三回申請しました。しかし堯は三回とも赦すように言いました。天下の人々は皋陶が厳格であるのを畏怖し、堯が寛大であるのを喜びました。また、四岳がくという人が、ある犯罪人を赦して仕事に就けるようにしたらどうかと提案しました。堯はそれはできないと一度は言いましたけれど、その後で、試しに用いてみようと言いました。この二つの例から、堯の心は明らかであります。

こういう言葉もありました。「罪の疑わしいときは刑は軽くせよ。功績の疑わしいときにも賞は重くせよ。無実の者を殺してしまうよりは、罪ある者を取り逃す方がまだましである」。すべてはこれに尽きます。賞を与えるか与えないか、与えなくてもいいときにまで与えるのは思いやりが過ぎます。罰を与えるか与えないか、与えなくてもいいときにまで与えるのは厳し過ぎます。思いやりが過剰であって

も人として欠陥があるとはいえませんが。しかし、厳し過ぎるのは残忍であって人間性を失います。

昔は賞として地位や俸禄を与えることはなく、罰として刃物を用いることはありませんでした。地位や俸禄を与えれば、賞はそこだけにとどまって、それ以上の広がりを持たないからです。刃物を用いれば、刑はそこだけにとどまって、それ以上の広がりを持たないからです。天下にあるありとあらゆる善を全て賞するのに、位や俸禄はまるで足りません。天下にあるありとあらゆる悪の全てに刃物を用いたら悲惨なことになります。昔の天子は賞も刑も疑わしいときには全てに思いやりを及ぼし、世の人を正しい生き方へ導いたのです。ですから刑罰は厚い真心、すなわち忠厚のこの上なきものであると言ったのです。

——へーえ、科挙の小論文の答案ってこんな感じだったんだ。聞いて思ったのは、なんかトバー君らしいなって感じた。トバー君って、おおらかでやさしかったりするから。それとちよつと驚いたのは、冤罪をなくすために「疑わしきは罰せず」っていうのがあるけど、それと同じようなことが大昔から言われていたんだね。だけど、昔の中国っていうと、拷問で無理やり白状させて、冤罪バリバリみたいなイメージなんだけど。全然ちがう？

㊦ うーん、それは厳しいご指摘です。中国のどの時代でも恐るべき拷問が行われていたのは隠せぬ事実です。私の時代はかなり穏やかな方であったと言っているでしょうけれど、私自身も拷問とは無縁ではなく、身体に若干の危害を加えられました。唐や明の時代であったのなら、私は容赦のない拷問にさらされて、

自白を余儀なくされていたでしょう。

——あつ、そうなんだ。トバー君はどんな目にあつたの？

① あまり思い出したいことではないので、それはまた後のこととさせてください。

拷問が横行したのは、制度上の欠陥によるのでしよう。中国のどの時代でも、行政官が司法権も持っていました。そして、刑事訴訟法のような手続きを細かく定めた規定はありませんでした。行政官の裁量に委ねられるところが大きく、真心に欠ければ容易に拷問による冤罪が生じてしまうのでした。そのような危うさに気付いていた行政官はいかにしたら冤罪を防げるかということに心を砕き、宋

の時代には、実際の判断の拠り所となるような実例集が幾つも編集されました。それはちよつと誇つてもいいようなことではないかと思つています。

——でも、真心に頼るつていうのは心もとないよなあ。だから、科挙で人間性を判定する必要があるつてことなんだろうけど、なんか危ういよね。

それはそれとして、すべての善を賞するのに位や俸禄はまるで足りないつていうのは、ちよつとおもしろい指摘だと思つた。どつかのある国では、春と秋にお国から勳章が配られたりなんかしているけれど、それこそまるつきり足りなくて、お上の目によく映るところだけが選ばれているつて気がするもんな。政治家が一番でつかい勳章をもらうなんて馬鹿みたいじゃん。

それで、いまの論文がよかつたんで、1番になりそうになつたの？

㊦ 論文の採点は数人の試験官が分担して行い、私の答案はたまたま梅堯臣ばいぎょうしんによ

って読まれることになりました。梅堯臣は一読すると、いかにも欧陽脩が好みそ
うな文章であったので、「これはいかがでしょうか」と見せたのです。

梅堯臣は宋の時代の新しい詩を生み出そうと長年努力してきた人で、官僚とし
ての地位は低かったのですが、欧陽脩は文学改革の先駆者として深く尊敬し、科
挙の監督チームの一員に招いていました。欧陽脩と文学観を共有する梅堯臣であ
ったからこそ私の論文にとくに注意が行ったのでした。

ここで少し説明しておきますと、科挙は不正、情実の入る余地が一切ないよう
に工夫され、採点者は答案が誰によって書かれたのか全くわからないようになって
いました。受験生の名前を伏せるだけでなく、筆跡から推定されることもない

よう答案は第三者によってすべて写し直されていきました。

欧陽脩は、梅堯臣から回された論文を一読すると、「私が求めていた新しい文章はまさにこれだ」と喜び、第1番に据えようと思いました。ところが、あまりにも自分の文学観にぴったりしすぎていたので、これは弟子の曾鞏そうきやうが書いたのではないかと疑い始めました。いろいろ考えた末に、2番目に優れる論文と順位を入れ替えて最終順位としました。不正は絶対にありえない仕組みになってはいても、自分の弟子を1番にしたらとやかく言われることは免れないと思っただけです。発表後に抗議デモがなされる当時の雰囲気でしたから、欧陽脩としては慎重にならざるをえなかったのです。そして、発表当日になって初めて名前が明らかになるのと、第1位が曾鞏で、第2位が私だったのです。

——おやおや、結局は弟子が1番とは、下手に工夫して失敗だったね。

① この答案にもうひとつオチがありまして、後に梅堯臣と顔を合わせる機会があり、大先輩に向かって鄭重に挨拶しますと、梅堯臣はとても照れ臭そうに、「科挙のあの論文には、皋陶が三回死刑を申請したとありましたが、そのことがどの書物に記されていたのかいまだに思い出せず、気になっているのです」

梅堯臣はまことに実直な方で、真摯な姿勢でのお尋ねに、私はひどく恐縮し、そつと耳打ちしました。

「典拠となるべきものは長い歳月の間に失われてしまったのでしょう」

梅堯臣は一瞬きよんとした顔になり、次にぎよつとした目で私を見ますと、かたわらにいた欧陽脩のところこそそくさと歩み寄り、

「たつたいま失われた書物についての新説を聞きましたので、ぜひご伝授いたしたい」

やはり耳を寄せて話しますと、歐陽脩は破顔一笑、私のもとへやってきて肩をたたき、

「我らの誰もが貴公の新説を知らずにいたことで、我が宋国は大才を朝廷に迎えることができたわけですな。老婆心ながら、貴公はそのことを今後は口外せぬがよからうとご助言申し上げたい」

——えーと、そのココロは、もしかして、でっちあげっていうこと。ホントに？へーえ、そうなんだ。よくまあ、大事な試験でそんな大胆なことができたもんだ。ボクはおじさんを相手にときどき法螺話をするけど、トバー君とはスケールが

違いすぎる。トバー君って、なんか思っていたよりずっとすごい人だったりするのかも。すっげえじゃん。

ⓧ とんだところで感心していただき、喜んでいいのやら……。

——まじで、トバー君を見直したよ。よしっ、ここは、鯛のかぶと焼きでも奮発して頼んじやおうかな。そろそろラストオーダーだし。

ⓧ でっちあげと言われれば、それを否定するのは難しいです。私が書くこうとしたのは賞罰の本質とは何かということですよ。堯は大昔の聖天子ですから、その本質に則って刑と賞を用いていたことに疑いはありません。ならば、堯と皋陶の間

には必ずそのようなことがあったのです。そうとしか考えられないので書いたままでです。

——えーとですね、富弼の用兵論のときもトバー君は同じようなことを言ってもかまいません。書きたいことを書くというのがトバー君の流儀なんだね。

㊦ 口の中の虫をぱつと吐き出すということです。欧陽脩が総監督ではなくて、私の答案を読んだ人が皋陶の件には典拠がないと見抜いて、それをもって不可としていたならば、私は不合格となっていたでしょう。典拠のないことを書いたら不利になるかとかいった計算なしに、書きたいことを書いたのです。試験の場であってもそれ以外のことは私にはできませんでした。それも含めて、私の全人

格が反映された試験の答案であつたのでしよう。

このときの科挙から、文学の改革は加速され、文章も詩もそれ以前とは一変して、後戻りすることはありませんでした。しかし、科挙の試験は、そうした文学の潮流とは切り離して、官僚としての能力の有無を問う実務的なものであるべきだというのが次なる改革の主張でした。

——まだやっぱりそっちの方がいいように思えちやうんどけど。さつきトバー君が言つてたように、司法試験で俳句や短歌の実技が課せられることはないんで、文学観と司法試験とか国家公務員試験とかは関係しないと思うんだよなあ。それに、人格を重視するっていうのも大事だけど、試験でそれがわかるのかなあつて気もする。人格的にいくら優れた人であっても、国家の運営とか、あるいは行政

の実務をこなすとか、そういうところでは不得意であったりするんじゃないのかなあつていう心配もあるしね。

㊦ 中国の伝統的な価値観として、文学と人格は一体であり、人格と政治は一体であり、よつて文学と政治は一体であるとするというのがありました。偉大な導き手であった孔子は、人格の陶冶に詩が必須である考え、『詩経』という詩のアンソロジーを編集し、それは儒学の最も重要な経典の一つとして誰もが必ず学ぶものとされてきました。詩の名手であり、かつ偉大な政治家がたくさんいたのは、中国の誇るべきところであると、21世紀のいまも私は思っています。

その一方で、偉大な政治家で詩が不得手であったという人も当然ながら大勢いました。私の時代でいえばスーパースターの1人の富弼がまさにそうでした。富

弼は科挙で詩賦が課せられる限りは合格できないと一時期は絶望したようです。

富弼の才能を惜しむ人が、科挙とは別の特別試験を実施することを皇帝に進言しました。科挙ではすくいとれない才能を拾い上げるために、時折、せい制科かという試験が行われていました。富弼1人のためというわけでもなかったのですが、詩賦をはずし、その代わりに非常に難しい論文試験を課した制科が実施され、富弼はみごとに合格しました。富弼は詩賦を作らない宰相となったのでした。ついながら、我が父も詩賦は得意でなく、旅の間に親子3人で詠んだ詩集を編みましたが、父の詩が生硬であるとするのは多くの人の評価です。さらに言えば、父は科挙に落ちたばかりでなく、制科にも落ちています。

人格的に優れてはいても政治的に無能であったという残念な人も実際にいました。しかし、どうなのでしょう、人格的に首をひねるような人であっても政治

的には有能であるのと、どちらがいいのでしょうか。極論で人々を煽動する有能者が民衆に歓迎されるといふ兆候がいまの世界には見えます。その行き着くところの典型がヒトラーであるのでしよう。ヒトラーは実に有能者な人でした。そのような指導者に、技能優秀な官僚団が従順に仕えるという状況は喜ばしいことなのでしょう。私たちの時代の次なる改革はそのような実務集団を作り出すことを目指しているように私の目には映ったのです。新制度のもとでは、寇準のような豪俊が出てくる可能性は限りなく低いでありましょう。

——なるほどね。皇帝のいた時代だから、単に技能に優れるだけでは危ういもん。皇帝に煙たがれるような人がいないとダメなんだろうね。そういうことなら、トバー君が反対したのも理解できるかも。いまの学校教育もなんか類似の方向

性を志向しているのかも。道徳を正式教科にしようっていうのも、言ってしまうと、上に立つ権力者に従順に仕えることがすなわち道徳であると教えようとしているように思えるもんな。だから、道徳っていうとすぐにうさんくさいって感じちゃうけど、ホントはそうじゃないと思うんだ。

へんな言い方かも知れないけど、社会の矛盾を鋭く見抜いたジョン・クレアの鋭い感性こそが、真に道徳的なのではないのかなあって思ったりもするよ。だからといって、ジョン・クレアが総理大臣になったらいいとは決して思わないんだけど。それはジョン・クレア本人もきつと望むところではないしね。鋭い感性が大切ということなら、極端なことを言うと、ノーベル文学賞を取った人が、地球共和国の大統領になったらいいみたいなことになったりするもんな。それだと、理想ばかりが先行して、実際の政治は空回りってことになったりするかもしれないな

いし。

㊦ 理想が先行しない政治がどれだけの不幸を人類にもたらしてきたかを思い起こす必要があります。あるいは、不道徳な似非理想に導かれた政治があまりの戦争を引き起こしてきた事実を直視しなければなりません。

道徳とは何か。「思いやりを及ぼし、世の人を正しい生き方へ導いた」と私の科挙の答案で書いたことが、すなわち為政者にとっての道徳なのであります。

「思いやり」あるいは「真心」を何よりも重視するのが孔子以来の考え方です。儒学の用語で言うと「仁^{じん}」です。「仁」とは何か。人間の心の最も善良な部分であると説明するのがわかりやすいでしょうか。

——そっかあ、「仁」かあ。寝てばかりいた漢文の授業で、そんな言葉を聞いたよな気もするけど、ボくらには関係ないよなあって思ってた。

① 仁について語り出すと、儒学の講義のようになってしまいそうで、夜も遅いいまそれをしてら、それこそあなたは眠ってしまおうでしょう。ラストオーダーの時刻も過ぎたので、このあたりにしておくのがよろしいかと思えます。

——じゃあ、最後にひとつだけ聞いておきたいんだけど、「誰かさんが変革とやらを言い出して」と詩に詠んだ「誰かさん」っていうのは誰だったの？ 一応名前だけでも聞いておこうかなあと思つて。

㊦ そうですか。あまり昔の人の名をたくさん挙げるのもどうかと思っていま
いにしたのですけれど、それは王安石おうあんせきです。

王安石の名は世界史の教科書には必ず載っていて、きっと私よりずっと知られ
ているでしょう。私は生きている間に毀誉褒貶いろいろあったと申しました。王
安石は毀誉褒貶の振幅が私以上に大きかった人です。私が死んでから後は「誉褒」
してくださる人が多くいてくれましたが、逆に王安石は「毀貶」ばかりが多くな
り、20世紀以前の旧中国では、史上まれに見る大悪人のように言われています
た。私を鼻屑する方々は、王安石こそは私の不倶戴天の敵であったというストー
リーにするのを好むようですが、実際は違います。科挙の改革ばかりでなく、政
治上のさまざまな面で王安石と私は対立しました。考えが異なれば批判し合うの
は当然のことで、それは敵と味方というような区分けとは全く無関係です。王安

石こそは、宋の時代を通して最も傑出した人物であったと私は考えています。今日のいくつかの詩でおわかりのように、皮肉な言葉を投げつけてしまういつもの癖で、王安石を怒らせたこともありました。それでも、私たちは互いに認め合っていました。

宋という時代は歴史の流れに先んじ過ぎたところがあつたようです。王安石がその典型でした。王安石が提唱した科挙の制度改革は現代の人の目には当然のこととして映るでしょう。王安石は学校制度の充実も主張し、いずれは学校の卒業試験をもって科挙に変えるようなことも考えていました。法科大学とか工科大学とか実務者教育をする大学をイメージしてくださいと近いかも知れません。そのような学校で教育して、官僚集団を作るということを900年以上も昔に検討していた国はどこにもなかったであります。宋という時代が、あるいはとりわ

け王安石が早かった一例です。私が王安石に反対したのは、まさに早すぎたからです。王安石は遙か遠く先を見通しすぎていて、時代はまだまだとても付いて行けるようになっていませんでした。そのことからどのような悲劇が起こったのか、これから折に触れてお話することになるでしょう。

でも、いま思い出しますと、「遊たびの奇絶きぜつ」をあなたに向かってお話しようとした出発点は、いわゆる無名の人との交流を中心にして、私がいかなる人間であったのかを語って行こうということでありました。当時の政治上のあれこれに関することなどはあなたの興味をひかないでしょうから、最小限にして、王安石の改革について語るようなことはあるまいと思っていました。いま大恩ある欧陽脩について少しだけ補足しておこうというところから、ついつい王安石にまで話が及んでしまいました。次回からどのようにお話していくのか、反省が必要ですね。

——反省しなくたっていいと思うよ。王安石の名は、ボクが質問したから出たこととで、聞きたいことを聞く、話したいことを話す、どっちも行き当たりばったりで、それこそ虫を吐き出したかったら吐き出すという方式でいいんじゃないのかなあ。ボクはこれまで宋の時代なんかにはまるつきり関心がなかったんだけど、なんかだんだん近くなってきたような気がするしね。

㊦ それにしても、最初の船旅がまだ終わらないのは、話の進みがさすがに遅すぎましよう。このような調子でこれからも続けていいものかどうか、何かご要望がありますか？

——要望なんかありません。ボクは予備知識ゼロだから、要望を考えるもがないからね。ボクの叔父さんに聞いたら、たぶんなんかあるだろうけど、それを取り次ぐのも面倒だし。おじさんのことだから、トバー君が行き当たりばったりでどんなふうに話してくれても、あのチャチなホームページに載せるに当たっては、たぶんうまいこと整理してくれると思うよ。それにしても、おじさんはホームページにもう載せてくれているのかなあ。学校で人にものを教えているくせに、当人は仕事ののろいダメ人間だったりしたら笑っちゃうよね。B型のマイペース人間だから、自分ののろさに気付けないのかもね。

ここで録音が終わった。私への批評を並べたところで、まずいと思ってスイッ

チを切ったのだろうか。

イノ君にのろいと言われたのでは、暑さを言い訳になどしていられなくなり、ホームページに載せる作業にあせって取り組んで、ようやく8月14日に最初のアップを果たすことになったのだった。